常陸
[illegible]料

郡郷考

上

ル 4
5011
2

門 5011 流 卷 八

水戸 宮本元球著

常陸誌料

郡郷考

博文館藏版

39 9967

宮城縣立圖書館

常陸國郡郷考

目録

卷一 建國 原始 境土 土壤沃瘠 田額 出舉 調庸 器仗 馬牧 驛傳馬 雜藥 健兒 官員 太守 國造 盛衰

卷二 新治郡 郡 郷 神社 庄 保 私稱郡 河 湖

卷三 真壁郡 郡 郷 神社 神祠 庄 山 岡 河

卷四 筑波郡 郡 郷 神社 庄 保 山

卷五 河内郡 郡 郷 神祠 庄 沼

卷六 信太郡 郡 郷 神社 古祠 庄 河

巻七　茨城郡　郡　郷　神社　神祠　庄　河
巻八　行方郡　郡　郷　神祠　庄　海
巻九　鹿島郡　郡　郷　神社　古祠
巻十　那珂郡　郡　郷　神社　庄　保　私稱郡　私稱郷　河
沼　附下野那須郡二郷及神社國造碑
巻十一　久慈郡　郡　郷　神社　庄　河　及今隷本郡陸奥白河郡
地依上郷并神社
巻十二　多珂郡　郡　郷　神社　山　關
附録　式外贈位神祠二

常陸國郡郷考目録　終

常陸國郡郷考題言三則

一斯書ハ風土記の全文を郡郷ニ配して悉く載と其山川地名等ハ皆今地ニ驗して是を考え和名鈔郷名神名帳の官社兵部式の驛家國史贈位ヲ神及庄保私稱ヲ郡歌枕の名所等まて遍く古今の諸書及古文書等に據て其考を著をり其餘毎村ヲ田額村名乃變遷等ハ後編志料ニ讓テ此ニ畧次

一本國郡境文禄慶長撿地の時より變遷甚多く古新治郡ハ極西ニ在て毛野川ヲ東より北ニ長く那珂郡と界をし郡なりしを今ハ其毛野川ヲ東なる地を中世關郡伊佐郡ニ栗保と稱をし處皆真壁郡ニ入て北地

ハ中世中郡笠間郡と稱きし處茨城郡ハ入アて古ハ疆土ハ寸地も存さに別ハ
古茨城筑波河内三郡ハ地を割て新治郡を置き其郡中荒張と云
ふ所と新治村とさえ改きれも考古の為ハ迷惑さア其餘十郡も
亦皆沿革少なからに今斯書ハ風土記ハ四至和名鈔ハ郷名を本
とし諸書ハ徵して古時の疆界我考たれも其謬も亦多からさ所
〳〵
一一覧して其地勢を辨きるも地圖ハ便なるハ若くハなし因て今
小圖を製して巻首ハ掲し郡郷神社山川等ハ在處方位を示に斯
書を讀んハハ本編ハ考証を檢して此圖に參見をハ其土疆ハ迷

なるハ〳〵但紙ハ幅員なし各地遠近廣狹を精しくなる能ハに
其細密なる事ハ別に新製ハ大圖あり合を見る〳〵
一余固より假名つうひてハをハの學ハ昧ハ社を其誤も多くして
看ん人のよ笑まるも難さ所くもあら弄と冀ハ大方のゆるし給
ひ祈

安政六年己未正月　水戸　宮本元球仲笏　識

常陸國郡鄉考圖

郡十一　鄉百四十一　式社卅附一

新治郡　鄉十二　式社三
真壁郡　鄉八　式社一
筑波郡　鄉九　式社二
河内郡　鄉七
信太郡　鄉十四　式社二
茨城郡　鄉十八　式社三夷針不詳
行方郡　鄉十六及餘戶八代不詳
鹿島郡　鄉十八三宅不詳式社二
那珂郡　鄉廿二大井不詳式社八亦大
附下野那須郡二鄉及式社一
久慈郡　鄉十九及餘戶真野楊島不詳
式社六、及陸奥白河郡依上鄉幷式社二、
多珂郡　鄉八　式社一

其餘山川丘壠屈土記所載者大氏表其名圖上以示其所在至如庄保私稱郡及歌枕名所古蹟式外贈位神並舊祠非斯圖所盡表焉故不及具載覽者就全書檢之可矣

常陸國郡郷考卷一

水戸　宮本元球仲芳　著

建國原始

風土記云常陸國司解、申古老相傳舊聞事、問國郡舊事、古老荅曰、古者自相模國足柄岳坂以東諸縣、惣稱我姫國、按我姫を紀吾妻吾嬬ふ作る古事記景行卷云、故號其國謂阿豆麻也上野吾妻郡ハ和名鈔音阿加豆末又按發端の一行ハ續紀和銅六年五月の官符ま從ひてその文まて建國此事ふハ要ふ多れとも此書ハ風土記を根據とし其文を各郡郷の下に移して解せふふ專善本の文ふ從ひて原文の面目と失ハさる茂欲す故ふらまる原本此まを載ゑ下文郡郷の下に割移せるを○の内ま一二の次第を書して旧文の前後を示すなり　是當時不言常陸、唯稱新治筑波茨城那賀久慈多珂國、各遣造別令檢校、其後至難波長柄豊前大宮臨軒天皇孝德之世、遣高向臣、中臣幡織田連等、惣領

自坂以東之國、按高向臣織田連ハ後ふ大夫る作る姓氏錄高向朝臣武内宿祢六世孫猪子臣之後也、織田姓ハ詳なられ式越前敦賀郡織田神社あるハ其地名なる歟、惣領を持統紀伊豫惣領、續紀文武四年竺志惣領周防惣領吉備惣領なとあり、于時我姫之道、分為八國、常陸國居其一矣、按崇神紀十年武淳川別遣東海と古事記遣東方十二道ふ作る其景行卷にを東方十二道あり蓋東海道の地をいふ孝徳紀二年東方八道とあるを即此八國ふを相模武藏上下總上下毛野常陸陸奥とい ふ安房伊豆を後に立たる國なり、所以然號者、往来道路、不隔江海之津濟、郡鄕境堺、相續山河之峰谷、取近通之義、以為名號焉、按建國の始より國名の義まく此文ふ盡せり古事記續紀常陸を常道ふ作る萬葉常土に作る常陸を和名鈔音比太知萬葉比多知とあり、或曰、倭武天皇巡狩東夷之國、幸過新治之縣、所遣國造毗那良珠命、新令掘井、流泉淨澄、尤有好愛、時停乘輿、翫水洗手、御衣之袖、垂泉而沾、便依漬袖之義、以為此國之名、風俗諺曰、筑波岳黑雲挂、衣袖漬國是也、按是又國名の一說也新治菟久波の歌を景行四十年紀ふれとあ國造本紀にハ比奈羅布命を作り成務定賜國造とあ風俗諺とハ其同時とあるふやされと新治郡條ふを毗奈良珠命と崇神の時あ下を大方枕詞なり

土壤沃壻

風土記云、夫常陸國者、堺是廣大地、亦緬邈、土壤沃墳、原野肥衍、墾發之處、山海之利、人人自得、家家足饒、設有身勞耕耘、力竭紡蠶者、立即可取富豐、自然應免貧窮、況復求鹽魚味、左山右海、植桑種麻、後野前原、所謂水陸之府藏、物産之膏腴、古人曰、常世之國、蓋疑此地、但以所有水田、上少中多、年遇霖雨、即聞苗子不登之難、歲逢亢陽、唯見穀實豐稔之歡歟、

原云不略之○按和名鈔毎郡の郷數他國ふ校するに多き淺見きを當時戸口の繁昌思ふへし本文虚言ふはあらにされと上田少きハ膏腴なてハあらさるしかる今田園薄瘠多く原野の廣莫開墾ま堪へ以古を元陽に有年ありしを西南水流ま傍たる地の事なる爾一雨暘適宜ふを豊熟なるを今他國に異ふらを

境土

和名鈔常陸止太知國國府在茨城郡行程上三十日下十五日按行程主計式同これハ朝集使京師往復の日限也管十一郡按民部式同又大遠とす新治甬止波里○按十二郷上郡也真壁萬加倍○按七郷下郡也筑波豆久波○按九郷中郡也河内甲知○按七郷下郡也信太志太○按十四郷上郡也茨城牟波良岐○按十八郷大郡也行方奈女加多○按十六郷及餘戸大郡也鹿嶋加之末○按十八郷大郡也那珂按廿二郷大郡也蓋郷數誤あり久慈按十九郷及餘戸大郡也多珂按八郷中郡也

按戸令云凡郡以廿里以下十六里以上為大郡十二里以上為上郡八里以上為中郡四里以上為下郡二里以上為小郡この里ハ郷をいふ出雲風土記ま神亀元年改里為郷とあるを是なるを是古ハ郡郷の大小を稱そる地の廣狹と論をに戸口ま多少ま以て大小とせしこ本國總計百五十餘郷也

田額

和名鈔云田四萬九十二町六段百十二歩按孝徳紀田租の法ま凡田段為町段租稲二束二把とあり一束ハ十把の事こ令義解にそ段地獲稲五十束束稲舂得米五升也即於町者須得五百束也どあを こ是ふて筭それを全國一歳收穫の稲米より租稲の數まるを知るへしされと租法ハ續紀慶雲五年ま一町より里廿二束と改そ十五束まなりし事を令集解ふ其年と界とそ令前令後とそ分ち說者ま是れも畢竟を外の大小異ふるのこ實數ま至りてハ前後ともに大異あるふ行ふにと云ふ度量の學ま味ひ〻ハ前後の數と并舉を考ふ備ふ

獲稲貳陌萬肆阡陸陌參拾壹束五把五五　此米陌萬貳阡參陌拾五石漆斗漆外漆合漆夕　これ一年の作を高也

令前田租捌拾捌萬貳阡參拾漆束捌把捌捌　此米肆萬肆阡壹石捌斗玖升肆合貳夕　これ田租の納高なり

令後田租陸拾萬壹阡參陌捌拾玖束肆把陸陸　此米參萬陸拾玖石肆斗漆升參合參夕貳　あまを同前

右の外田額の異同浅載るを諸書より撰出しを左に列し參考に備ふ○拾芥鈔云、田四萬二千卅八町、伊呂波字類鈔、新撰類聚往来、國華萬葉集等こまを從ふ○掌中曆云田四萬九千九百十二町○海東諸國記云、田四萬九千九町六段○以上三書異同あるを今考るに由なきれども何きも和名鈔よりも其數多きを見きハ田の墾闢あるて額の増しる事ハ知らまたを然るに○集古圖所収下鴨社輿地圖云田壹萬二千卅八町、運歩色葉集節用集等これに從ふ此數上諸書より名餘りを此圖の年代ハ詳ならされとも本國に傳ふる弘安の作田勘文嘉元の田文なと類ふる國衙所管の公田をのみ載るるるハふるゝ勘文ハ殘闕るて全數知る能ハるに田文ハ九千三十六町七段あり○諸國高附云高五十三萬二千百石、此書天文十二年、日本國中知行高寄高本光

資上野晴時二人、諸國帳請取之と記るる足利義晴將軍の有司ふや俗ゝ天文縄と稱るる類ふる歟〜○天正記云、高五十三萬石、太田和泉守記とたを豊臣家檢地帳の目録るて寛永日本得名當代記等も此高く○文禄三年豊臣大閤檢地帳云、高五十三萬八石

按上々大數是ハ全數なるゝ〜古今城主記正宗寺所藏慶長九年縄入帳も此高ふ同し是時ゝを一段ハ三百歩を減せ〜なきハ高めらゝふ止りを亂雜の後るゝ荒廢の地多うゝしと見四○正保二年地圖云、高八十四萬八石○寛文五年記云、高七十五萬三千六百石武家勸懲記延寶三年亦同、和漢三才圖繪ハ六百石餘とあを正保ふ此高ゝを多きを云いう〜○元禄十五年地圖云、高九十萬三千七百七十八石四斗五升八合永樂廿壹貫文按此永樂の事ハ新治郡小栗保條ふこれを詳るふ去

出舉

按米穀を貸出し利米を取ると云ふ

和名鈔云、正　按正税の出舉公　按公廨の出舉各五十萬束　雜稲七十九萬六千束

本稲百七十九萬六千束　按正税と名朝廷へ上る田租の名廨ハ説文公廨也、字彙官舍とあり国廳の事之

正税出擧ゑ其利と共ふ全く朝廷へ納めゑく公用の不足を補ひ公
廨出擧ゑ其利ゑて所管の負欠未納を補ひ日朝集使還國の路粮
其餘國中の要なゑ事ふ使用しゑ殘ゑあれゑ廳官の配分となる
交替式ふ詳と且其内に天平十七年始置公廨といふ事も見えゑ
ゑ聖武の弊政ゑり起ゑ〳〵事と續紀天平六年正月ゑ聽諸國司毎
年貸官稻大國十四萬以下上國十二萬以下中國十萬以下下國八
萬以下如過此數依法科罪又十七年ふ諸國公廨大國四十萬束上
國三十萬束中國二十萬束下國十萬束ともあり是正公ともに此
朝ふゑ始ゑた事ゑり本國ゑ大國なるに本文の數廿萬束を
多くゑるハ後ふ增加ゑしと見は原雜本の位を例置ゑる故ふ人
往々ふ其解ゑ惑ふ本稻ハ正公雜三件の貸出し本ゑゑ其總數ふ
ゑハ今とれと訂正せり下の主税式と校しゑ其然る伐知ぬべし

主税式云正税公廨各五十萬束　國分寺料六萬束

按續紀天平十六年詔諸國割正税四萬束以入僧尼二寺各二萬束毎年出擧以其息利永支造寺用と
ゑる其始ゑく是又二萬束を多くに僧尼二寺ハ國分寺國分尼寺
の二つなゑ税所氏所藏嘉吉二年正月留守所下文云正月八日吉
祥御願請僧御布施伍阡玖百二十四束事三寶御布施三百束講讀

師并請僧御布施伍阡陸佰二十四束右依太政官天平神護二年五
月十七日延曆四年三月廿日兩度符旨奉上所如件とあるハ此項
ゑも布施あり〳〵ふ此布施ゑハ

正税と用ひ〳〵事主税式ふ

大安寺藥師寺料各五萬束　文殊會料二千束　藥分料

按典藥寮へ納る藥物の價く

交易料四十二萬束

按何物と交易の料ふや此目唯本國ゑなく

大學寮料五萬四千束

按大學寮式云凡常陸稱稻五萬四千束近江越中備前伊豫等國各一萬束預國司出擧
以其息利養米并交易輕物毎年附貢調使送納充於寮家雜用と此
と主税式備前の下ゑ一萬一千束とある一千ゑ行文なり扨此事
式にうく載ゑまと幾程もなく廢格ゑ〳〵ふや三善清行意見封事
第四條云請加給大學生徒食料事又有令常陸國毎年出擧稻九萬
四千束以其利稻充寮中雜用又擧丹後國稻八百束充寮中雜用學
生口味料年代漸久事皆闕違と見ゑ封事九萬四千束ゑ以ゑ全く
本國の出擧とゑるゑ記臆の誤と又云望請常陸丹後兩國出擧本
稻九萬四千八百束之利稻二萬八千四百卌束之代遍以諸國田租
充給學生等食とき之又主税式ゑ檢ゑれハ凡丹後國稻八百束預

國司出舉以其息利交易味物送寮充學生等菜料といふ是こ出舉の息利ハ今ふ半倍とあれと餘ふ高利ふきハうや養老四年三月六年閏四月天平勝寶五年九月等ふ出舉十束取利三束と行り延暦十四年うも同し今と下し大同元年又半倍ま復そし〻ら竟ふ弘仁元年九月ふ至そ〻諸國出舉官稻率十束收利三束とを定まりし故ふ今封事の息を三之一の數こ此封事の事行うきたるやいふ

修理池溝料四萬束　救急料六萬束

按續紀延暦八年四月美濃尾張參河三國年飢開庫准賤價糶米以其價至秋置穎名曰救急とあるもの此出舉の始多そ〻く其法の變そし〻ふ〻べし

俘囚料十萬束

按三韓の歸化蝦夷の俘虜を安置廩給そ〻ふ料ふて此國分寺料以下九件ハ即和名鈔の雜稻うて式ハ總計百八十四萬六千束あ〻ま拾芥鈔も此數ふ從ふ和名鈔ま校そきハ五萬束減多くそり此百八十四萬束を米うし〻く九萬二千三百石なりこ祇に半倍の息減出きハ四萬六千百五十石ふて本子惣計十三萬八千四百五十石となる田租ハ上ふ行る如く一町より一石一斗と出すに此出舉ハ田租うそハ三倍餘うそ田額ふ配當して貧富とも出すに〻しても田一町うり租稻ときまハ四石三斗之況や借貸ハ中民已下の事ふきハ歳々の返辨ふ官吏の煩擾民産の儲蓄ふたも亦推知るへし故ふ朝廷うもこれを憂ひ負觀四年畿内の出舉を罷そ百姓の堪否を試こやうそ天下ふ及さんと爲給ひしうと其計行ハきを難くして元慶四年又舊ま復し出舉そし事三代實録ふ見えたそ四海困窮せし當世の樣想ふへし扨此本稻和名鈔ふ案そ五萬束多ふ故こと考るふ類聚三代格弘仁二年二月太政官符ふ應出舉郡發稻五萬束事と行る此五萬束うて其文ふ右得常陸國解�√此國去京師行程遥遠貢調脚夫路糧乏絶仍故守從四位上石川朝臣麻呂以去靈亀中始置件稻毎年出舉以利充粮其用度者附帳言上而去大同四年主税寮勘出不被官符輙以出舉望請依舊出舉擬濟飢乏謹請定裁者右大臣宣奉勅依請こきこ此出舉靈亀中ふそハ十餘年已ふ置たきときいまた官符を被らさる故公ふ計帳ま載さるを以そ和名鈔を著そし時其數ふ及ハそりし〻式に郡發の目ふきハ他國うそ其名ふき故ふ交易料救急料ふとの内こ加えそ載うる所〻此本稻の數式と鈔との異同うて和名鈔ハ弘仁二年以前の成書ふるを知きり且後紀弘仁二年正月丙午於陸奥置和我葛縫斯波三郡とあるを三郡とも和名鈔ふ載されハ其成書弘仁二年以前ふある事疑ひふし或云陸奥郡名ハ民部式うも此三

郡をけまハ此三郡ハ蝦夷の地なりと弘仁二年以後又廢をー事ハ
ものと見ゆ其郡を載さるハ以て年代の証とハなしー難ーと是を
深く考へさるの論なり蝦夷ハ亂陸奥ハ於て延暦の末坂上田
村麻呂膳澤斯波の二城を築ひしに止りて賊地悉く版籍ハ入る
ハ何の時ハ又廢せんや陸奥ハ賊其後
ハ至りて安倍頼時ハ亂のみ出羽ハ元慶まで蝦夷の亂ハ
と異なり且民部式ハ三郡を載さるを後人傳寫ハ脱誤なるべしー其
故ハ神名帳ハ斯波郡あり是破綻を露ハせるなり式ハ久年の傳
寫ハて地名の類誤多ー兵部式驛傳馬
ハ係なく特ハ訛繆あるを考訂ハ難ー

調　庸　按唐書食貨志云、租庸調之法、以人丁為本、又云陸贄疏曰
有田則有租、有家則有調、有身則有庸、是調庸の法の據る所之

主計式常陸國　調　絁帛七十疋　絁纈絁三十疋　按今本國與郡紅藍を産す此調特本
國のこなるハ古よりの産をーと見ゆ　紺帛七十疋　黄帛一百六十疋　絁一千五
百廿五疋　長幡部絁七疋　按風土記久慈郡の出る所之　倭文三十端　按上ハ同　自

餘輸絁暴布　按暴布ハ風土記那珂郡の出る所之賦役令云凡調絹
絁絲綿布並隨鄉土所出正丁一人絹絁八尺五寸六丁
成疋長五丈一尺廣二尺二寸布二丈六尺二丁成端端長五丈二尺
廣二尺四寸これ疋端ハ布帛ハて其稱と異ハなり其長ハ大異な
今世の布帛二端あて一
疋とするハ同ドうらず

庸　輸布　按賦役令云凡正丁歲役十日若須收庸者一日二尺六寸須
留使者滿三十日租調共免役日少者計見役日折免通正役
並不得過四十日次丁二人同一正丁中男在京畿内不在收庸之例
義解謂次丁一人歲役五日若收庸布一丈三尺是為一常其留役十
五日者租調俱免也折免とハ其使ひたる日數ハけを庸と收めぬ
ハいふ正丁ハ廿より六十まて中男ハ十六より廿まで次丁ハ六
十一より六十五ハて又こハ役ハ殘ハ
いふ六十六以上をを耆といふ庸ハ　こを庸ハ其歲ハふまて役
日ハ多少あれを預め總數を定めるなり

中男作物　麻四百斤　苧　紙　熟麻　白暴熟麻　紅花　茜　麻

子　腊鰒 按戸令云十六以下為小廿以下為中作物ハ手作の物か令調副物小同〳〵其義解ハ謂此唯為正丁不及次丁中男也とあれとも式の時ハ其製改まるしく式此外駿河下野等十一國と共ハ麁絁の貢献載るも伊賀伊勢等ハ麁貢夏絁と調の内として上中麁三品の絁献貢を除諸國ハ調の内と為さるを命ある時のみ納る品ハ此三等の定めあるまて毎歳輸納を免ハあらさる故に調の内ハ入まさるなる歟〳〵

按上の調帛布端疋の數を以て其丁數と筭それを正丁一萬一千人餘なり是當時本國歳々増減かさ正丁の數まて自餘輸絁綿布とかる分ハ時々増減あ按ら其數定まりふまえ 按和名鈔本國十郡百三十六郷戸二万餘戸ハ一郷五十戸筭すまを戸數六千八百餘戸と

雑藥

典藥寮式諸國進年料雑藥　常陸國廿五種　青木香卅斤 按本草釋名曰後人呼馬兜鈴根為青木香啓蒙云後世方書及和方中ニ青木香ト云ハ馬兜鈴根ナリ和名ハマノスヽ和名鈔香藥部俗云象目と同名弁麻乃須須なきとも同品ならざるに似たり　桔梗六十斤 按本草和名和名鈔並阿里乃比布木本草和名又乎加止々岐　芎藭 按本草和名和名鈔並阿里乃比布木本草和名又乎加止々和名本草云於無奈加豆良又弓窮二音　大戟各七斤 按本草和名波也比止久佐和名鈔波夜比止久佐ホ擾ハハマハハヤの誤今名たりとうさゝと呼ふ　前胡 按本草和名宇多奈一名ノゼリ　枸杞各十四斤 按本草和名奴美久須祢和名鈔沼美久須利俗音久古　獨活二斤 按本草和名和名鈔並豆知多良一云宇止　虵銜五斤 按本草和名都ホ女康賴醫心方宇都ホ女啓蒙オーコ（ビイチゴ）　白朮廿斤四兩 按本草和名和名鈔並乎介良　藍漆七斤 按詳から云本國の外廿二國の進物ホまを奇品ホ々あらさ乃ま似たり　龍膽五斤 按本草和名和名鈔並衣夜美久佐一名迩加奈啓蒙云リンドウ　杜仲八

介 按本草和名和名鈔並波比麻由美　白芷五斤 按和名鈔與呂比久佐、一云加佐毛知、本草和名又佐波宇止盤心方佐波曽良之啓蒙ヤヤウト　白頭公一斤 按本草和名、和名鈔並於木奈久佐一云奈加久佐啓蒙ヲチコハナ　茯苓百六十六斤 按本草和名、末都保止末都奈岐、和名鈔古末豆奈木　當歸二斤十兩 按和名鈔於保世里、一云夜末世里、宇萬世里、本草和名又一名加波佐久、　甘草廿五斤十三兩 按本草和名、阿末岐、出陸奥國國の外陸奥十斤出羽五斤送進む獨本國の數二國ゆゑ五倍かるゝ當時産さる所多ゆゑ之今ハ其産さる所あるを聞ふ云　黄蓍四斤 按本草和名、也波良久佐、一名加波良佐々介、和名鈔夜波良久佐　狼牙一斤九兩 按本草和名宇末都奈岐、和名鈔古末豆奈木　干地黄一斗三升　薯蕷二斗 按本草和名、和名鈔並夜萬都ゝ毛、俗云山乃以毛、　麥門冬六斤 按本草和名也末須介　桃仁二斗三升　附子一斛 按本草和名於字啓蒙トリカブト　蛇床子 按本草和名、比留免之呂、一名波末世利、和名鈔比流牟之呂啓蒙ハヤニンジン海邊ノ砂

土二生ス　石依前件附貢調使、送寮檢收訖、即與返抄 按式上文ハ凡諸國醫師公廨人別所給十分之一、毎年割留隨國所出交易輕物、附貢調使送之、若有未進、移主計寮、令拘使返抄、どあれハ其藥の産さる國々ゆて醫師の配分さる公廨の十分一を此買上とゝなすゆゑ〳〵之其餘ハ藥分料と用る事と見えゝり返抄ハ請取書と云ふ又此外ハ民部式諸國貢蘇番次ハ第二番なゆゑ蘇酥同翻譯名義集牛乳まゝく作まる事浅載す政事要略本草和名等ハも其解を出さり

馬牧

兵部式諸國馬牛牧　常陸國信太牧 按信太郡小野の牧と說其郡ゝ下ハあゆゑ

馬五六歳齡毎年進左右馬寮、各備刷判、 按字書刷刮淨也判斫也馬云ふ

嗣仗 按嗣ハ甲を云ふ仗ハ横刀以下浅いふ

同上諸國器仗　常陸國　甲六領　横刀廿口　弓六十張　征箭六十具　胡籙六十具（按甲よりえびらまで浅造るの料ハ主税式に見えたり征箭六十具ハ軍防令に毎人征箭五十隻とあきらかに三千隻なり一具ハ五十隻と云ふ）百毎年所造具依前件其様仗者（按見せ本といふ）色別一箇附朝集使進之、

驛傳馬

同上諸國驛傳馬　常陸國驛馬　榛谷五疋（按信太郡）　安侯二疋（按茨城郡）　曾禰五疋（按行方郡）　河内（按那珂郡）　田後（按多珂郡）　山田　雄薩（按亜久慈郡）

按驛路の次第ハ先下總於賦驛（按於賦ハ相馬郡大井村なるべしといふ）本國河内郡に入る（按河内郡のこと傳馬なり且行程の使に就て云ふ）信太郡稲敷（按今ハ代村と説其郡に在り）朝夷（按根本村地名浅遺ると）二郷を歴て槇浦の上流浅渡を榛谷驛に至る（按今羽賀村と）國界なり此驛まで三里半（按大井より國界まで一里半なるべし）榛谷より曾禰驛に至る十四里（按行方郡手賀村に地名存せり厩牧令云凡諸道須置驛者毎卅里置一驛若地勢阻險及無水草處隨便安置不限里數これ驛浅置く定法なれども今の五里程まで一驛を建ること事なるべしこれ隔遠なるハ其間必一驛と脱せしなるべし兵部式諸國の驛誤脱少からず或云茨城郡茨城郷國府あるべし榛谷より九里平坦の路なるべき式に載さる一驛を國府まで一驛と脱せるに国府より曾禰まで五里にて恰好の路なるべきけれと兵部式美濃不破郡不破上野群馬郡群馬の類を皆國府の地に出せるを見れば獨本國のみ茨城の名浅載さる理なし傳説に昔々信太郡と茨城郡と接間なる流海を隔てゝ官道なりと云ふに付て思ふに信太郡島津郷の對岸なる茨城郡大津郷なる島津大津とも云ふ舟船の集れる地名なれども此二郷の内何れか驛家なるべしなり且島津の屬村なる屋敷大山村に驛長の宅趾と覺しくて長者屋敷もあり又

國府あるべしと傳説ふるを古の官道を府中の地より南まで三村の方より中津川ふるべきなどもいふふ因て思ふふ是又大津驛方より便路なり厩牧令ふ凡水驛不配馬處量閑繁驛別置船四隻とあるを兵部式ふも其地々船數を載ふれども是ハ全く水驛舟行の地と見えたり此地ハ榛谷より陸路三里嶋津ふ至る舟ふて半里ハ流海浅渡を大津ふ達をれば大津より陸路曽祢ふ至る々十里餘あるべし船と馬とを兼さきハ往復をくらいに已ふ風土記ふも不隔江海之津濟とあるを陸地連續の故ふ國名ともなるを由なるに陸路ふ少しの迂回あるとて津濟ふ就けるを云ハんをいふ況傳説に付て思ひよるのみにして其徴なるを但驛長或長者と稱し古驛ふ々必長者屋敷ある事ハ信太郡ふ詳ふ載す

八里按今安古村ふ安侯より河内驛ふ至る三里按上中河内村河内より山程ハ雄薩驛ふ至る四里按今大里村中世小里雄薩より山田ふ至る二里半按山田今松平村其名存ち説久慈郡ふ詳ふ山田より陸奥白河郡高野驛ふ至る十二里按國界徳田村まで八里徳田より高野まで四里高野々今棚倉之河内より瀬海ハ田後驛ふ至る九里按今田尻村ふ田後より益陸奥長有驛ふ達す按長有々其地詳ならず田後より國界勿来關まで七里なるべし是弘仁三年後紀以来の驛路なり按本國ハ平坦の地多き故ふや太氏卅里一驛の制なるをハ路程遠し又按風土記ふ載なる驛々榎浦式榛谷同地之曽禰式同板来式無和名鈔坂ふ作る誤河内式同助川藻嶋平津式並無巨神仙覺萬葉鈔所引風土記和名抄ふ々郷名之式無凡八所ふ其廢置たりし事ハ後紀弘仁三年十月廢常陸國安侯河内助川藻嶋棚橋六驛更建小田雄薩田後等三驛按弘仁元年文室綿麻呂陸奥出羽按察使となる二年三月ふ薩體幣伊二村の蝦夷浅征をるふ因て其四月ふ機急を告る為ふ陸奥ハ内ハ於て海道十驛と廢し更に本國ふ通をる道ふて長有高野二驛を置く此廢を十驛々續紀養老元年ふ岩城國を置たる時其國中ふ建つる驛にて其國と廢

しるべき要なる故之叔其警ふ付き又今年本國の驛ふ及つるべきに
と上ぶを舉し如く安侯河内の二驛を廢しき其まに代る地と置
ばれを何如ある故ふ後其緊要なる式以き復を事ハ兵部式
まて知られをを助川藻島を風土記ふ出たり棚橋或棚嶋ま作る
其地詳なるに和名鈔久慈郡楊島あり字形稍似ふまハ同地まき
をあるやや楊島亦詳ならに或云其郡折橋と云ふ地なを棚橋を折
橋と書たれうう後折ふ訛をき訓ともを改をしふるべし小
田を式及ひ風土記ま據を山田ふ誤り然るに近年式考異ふ式
浅以き誤ときを却て非ある猶久慈郡ふ詳ま辯をり助川藻島
と廢して二驛の間なる田後の一驛とせを頃と省けれ事知る
俗し

六年十二月廢常陸國板来驛　按板来驛を曾稱らを鹿島ふ赴け
る比用のまなまハ廢をしある俗
一式ふ曾稱ハ他驛と異あをき小路の常數馬五疋と置
きたれハ此驛浅廢をし故ふ其用とも兼たるなる俗　平津巨神
の廢せを史ふ漏たれと以き其年代知るふ由ふ

同上傳馬　河内郡五疋　按令の制と殊ふして式ま至まきハ諸國

とそに傳馬ま數減しき本國も唯一郡ふ存をるのみ　按厩牧令云傳馬每
郡各五然るふ河内郡のみなるを驛馬の國司量置不必須足ふ准
をし公式令給驛傳馬皆依鈴傳符尅數とき驛鈴と傳符とを比
を付ま數まき郡驛うう馬浅出をに親王及一位已下初位ふ至る
まき馬數の等差と舉たり厩牧令ふ凡公使須乘驛及傳馬者若不
足者即以私馬充又凡官人乘傳馬出使者云公式令ま凡在京諸司
有事須乘驛馬者皆本司申太政官奏給義解謂神祇官依幣帛宮内
省依御贄乘驛之類是也又謂國司向任及罪人令乘官馬者乘傳馬
之類後紀弘仁三年五月ふ伊勢國言傳馬之設唯送新任之司自外
無所乘用延喜雜式ふ凡國司不乘驛馬但正税大帳朝集等使乘驛
馬國司新向國乘傳馬なるを見き傳馬の用を甚狹られを其
數の減をし由と驛馬と用法ま異なるを浅知るべし　續紀天平寶
字元年五月勅曰頃者上下諸使憑附驛家於理不穩亦若驛子自今
已後冝為依令これを驛馬の便ふ就
く者多こうをし浅禁制をらきをるべ

健兒

同上諸國健兒　常陸國二百人

按健兒ハ皇極紀天智紀等ニ始テ見エタリト唐人ノ詩ニ多ク用ヒラルヽトアリ其職名トスルヽ續紀天平六年四月免諸道健兒儲士選士田租并雜徭之半トアレハ是ヨリ先ニ此職ヲ建タル人同十年五月停東海東山山陰山陽西海等道諸國健兒同十一年六月緣停兵士國府兵庫點白丁作番令守之同十八年十二月京畿内及諸國兵士依舊點差ニシテ兵士健兒互稱ヲ廢ス續後紀承和十年ニ健士ト稱シテ鎮兵ト別ち請射下健士准兵士下兵同令修理城隍許之トモアリ兵士ハ鎮兵ノ事ニシテ鎮兵ハ軍團ニ屬シテ射下ハ麾下ノ類ノ稱ニ續紀天平寶字六年文德實錄天安元年三代格貞觀四年等ニ文ニ據ハ其職務ハ固關又ハ貴使ノ送迎及上ノ守ニ兵庫ノ類ト見エシヲ兵部式諸國ニ健兒ヲ置クトアレトモ鎮兵健兒ハ二項ニ並舉タルヽ陸奥出羽ノ二國ノミニ無キ故ニ因之ト云ヒ又諸府總曰折衝府凡天下十道置府六百三十四皆有名號而關内二百六十有一皆以隷諸衛凡府三等兵千二百人為上千人為中八百人為下府置折衝都尉一人左右果毅都尉各一人長史兵曹別將各一人校尉六人士以三百人為團團有校尉五十人

為隊隊有正十人為火火有長トアルヲ斟酌シテ立タル制ナリ義解ニ團者聚也ト注セリ大小毅ノ名ハ果毅都尉ニ取テ主帳ヲ長史ニ依キテ職員令ニヲ官員ノ大率減舉ケ軍防令ハ其部下兵士ノ數ヲ義解ニモ各其國ノ大小ニヨリテ兵卒ニ多少アル減知ルヘシ此制天下ニ行ハレシ事ニヲ載ツレトモ邊要ノ外ハ每國必有シトモ思ハレス特ニ本國ヲトハ史籍ニ其跡絶ヘ所見カシ三代格延曆十四年五月太政官符ニ應以衛府舍人任主政主帳事右被右大臣宣奉勅衛府舍人係望軍毅今廢兵士其望已絶若有巧於書筭者宜用主政主帳トアルニ據ハ此項已ニ諸國ノ軍團ヲ廢セシ故ニ軍毅ニ代ラシムヽ人ヲ望メ郡ノ主政主帳ニ用ヒラルヽ云フ其後大同元年十月格ニ陸奥出羽日本紀略弘仁四年三月ニ太宰府政事要略弘仁五年正月ニ陸奥出羽續後紀承和十年四月ニ陸奥又嘉祥元年五月モ陸奥三代實錄元慶三年六月ニ出羽又同年十二月ニ佐渡元慶五年三月ニ出羽元慶六年九月ニ鎮守府等ハ皆たしかに軍團の事あれハ太宰府奥羽佐渡ハ廢をうせし兵部式陸奥鎮兵五百人出羽鎮兵六百人主税式凡陸奥國七團軍毅主帳卅五人粮米准太宰府統領以正税給之民部式凡佐渡國雜太團給軍毅一人職田二丁主帳一丁なりしを見えを式の頃も

此三國ハ現存セル其餘三代格貞觀十一年三月ニ隱岐十一月ニ長門十二年五月ニ出雲七月ニ因幡十七年十一月ニ石見元慶二年二月ニ壹岐對馬伯耆隱岐因幡出雲長門四年八月ニ越後寛平六年八月ニ能登七年七月ニ越後十一月ニ伊豫十二月ニ越中等の國弩師の事あるを弩師ハ軍團ニ屬セルものなるハ此諸國ニ此頃まてハ軍團ありしなるへし寛平六年ヨリ式ハ撰ハるる延長五年まてハ僅卅六年なれハ此諸國の内ニハ猶軍團の存せしもあらんニ式ニハ載たるまてハ原ハ右うぬうちせの叔又朝野羣載在廳部式ニ載たるまてハ原ハ右うぬうちせの叔又朝野羣載在廳下司五職の一ニ健兒所あるハ健兒ハ部領ハ職と見ゆ本國ハ健兒所ハ百濟姓平岡氏まて治承の頃ヨリ相傳て天正の末まて其家存せり系圖文書等今ニ傳ハれり

官員

按開闢の始より國造の制ハ是ハ時代事ハ毎郡ニ舉たるハ孝德二年改新詔以後の制と知ヨ

職員令　大國　守一人職掌ハ原書淺見るへし已下も同軍防令云給事カ八人　介一人同上給事カ七人　大掾一人同上給事カ五人　少掾一人同上給事ハ蓋上ニ同　大目一人同上給事カ四人　少目一人同上給事カ四人　史生三人同上給事カ各三人　博士一人同上給事カ五人　醫師一人同上給事カ四人　學生五十人　醫生十人

按是國府の吏員ニハ總計七十一人其事カ淺給ハる五十人ニ近し是ハ上戸ヨリ年々ニ出しき官員の家ハ事ハ奴僕ハ用ハ供ハる者ハ本國ハ承平ニ大掾平貞盛大功ありしヨリ其職ハ子孫ニ傳ヘ且其頃より國司の在任ハけきハ權柄大掾氏ニ奪ハ治承以後支族馬場氏其職ハ襲たるも猶勢威ありされハ總社元應元年十月文書ニ掾官ハ人中座五人書生十人一分五人御子ハ人國掌仕領姓名國雜色二人國舍人四人廳供僧五人總社供僧最勝經衆最勝講衆等十一人合五十餘人の連署あるハ此頃の大掾ハ時幹ニて即掾官の内ニ署せり盛時ハ其樣うなりたるを見るへし掾官ハ中座ハ座次ヨリハ稱と見ゆ廳供僧ハ平日何ハ中ハる務あるしや最勝の二項ハ國分寺の僧衆ハ書生ハ本文の學生ニ業殘博士ニ受ハ平日其師ハ助る務ハ是淺又公文といふ天應二年格証ハ一分ハ詳ニ闕戸正已曰交替式ニ公廨ハ分ツニ長官六分ヨリ五ハ減し史生ハ一分ハれハ史

生を稱するなる屬と説ふ是とも〻ふ〻書生の下ふ
次てゝれハ惜ふそ社とも定をうたゝ　扨又三善清行封事ふ延喜
よの前諸國ふ檢非違使あをし事見えられを上の吏員七十餘人
の外に其職もなりしなるゝ下野ふ押領使藤原秀卿あるふ就
を本國ふも其職の人なりしあやと思ふふ付て史料檢をるに此
職ハ陸奥出羽ふ嘗あきハ坂東諸國より援を出にふ其兵卒を押
送をるの使あを主典以上の精幹を取をし事を見ゆれを是ハ專
職此人ふうをしと見ゆ黒河春村曰檢非違使ハ弘仁七年ふ始を
見え齊衡二年三月大和國云諸國云天安元年八月攝津國云負觀
三年十一月武藏國云負觀九年十二月上總國云ふを史ふ其國々
浅舉
たを

同上　大郡　大領一人　少領一人　主政三人　主帳三人 並職掌を略をる

上郡　大領一人　少領一人　主政二人　主帳二人

中郡　大領一人　少領一人　主政一人　主帳一人

下郡　大領一人　少領一人　主帳一人

按本國ハ大郡五此員四十人上郡二此員十二人中郡二此員八人
下郡二此員六人總計六十六人ふり國府ふ通しを百七十七人と
なる又按孝德紀二年正月改新詔出てらを國造の制を罷ら是各
國國守郡領の政となる本國ハ其時誰人守介ふりしや知るゝこう
らに風土記慶雲ふ國司采女朝臣其餘年代を記さゝふ國宰當麻
大夫久米大夫川原宿祢黒麻呂なり國司ハ選叙令ふ大國介以上
中國掾以上又主典以上とをありて泛稱ふれを國守とハ定をう
多し續紀天武十二年大伴小吹負卒の下其曾て常陸頭たふと載
つる國守の史ふ見をゝる始をを文武四年十月百濟王遠寶為常
陸守ふ至をを其交替史と繹を大氏知るゝ其三年上總上野と共ふ
守ふ至をを其交替史と繹を大氏知るゝ其三年上總上野と共ふ
親王任國となり其以後ハ介を以を一國の長官とを為を諸
書ふ往々介浅常陸守
と記をるものなを

太守

類聚三代格、天長三年九月六日、太政官符、應親王任國守事、上總國

常陸國　上野國　右檢中納言從三位兼行左兵衛督清原眞人夏野奏狀�segment設置八省、職寮相糅、百官守職、庶務俱成、一事有闕、萬事皆緩、今親王任八省卿、此人地望素高、不得就職、無知碎務、仍此官事自懈、政迹日蕪、非是庸愚之所致、曰地勢使之然也、凡官人遷代必署解由、至有欠物、不免償物、居此之費、見其如此、望請點定數國、爲親王國、送任彼國、身留京師、意欲居京官者、一兩人將聽、若有守闕者、不補他人、其料物者、納置別倉、支無品親王之要、伏聽天裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良岑朝臣安世宣奉勅依奏、件等國守、官位卑下、宜改定正四位下官、以爲勅任、號稱太守、限以一代、不可永例（按此小據名先天子御一代と定められ一制あり一〜〜數世ホ延ゝ今太守ハふけまとる其制ハ猶當時の制の如し）是より親王本國の太守ゝり其遷代の次第ハ天長三年九月賀陽親王始任太守（帝王編年紀）七年正月彈正尹葛原親王任之（三代實錄）承和元年正月四品葛井親王任之（續後紀）五年正月四品忠良親王任之（同上）七年正月四品葛井親王再任（同上）十一年正月一品式部卿葛原親王兼再任（文德實錄）嘉祥元年正月四品時康親王任之（三代實錄）仁壽元年二品式部卿仲野親王兼任（文德實錄）天安元年四品彈正尹人康親王兼任（三代實錄）貞觀二年正月彈正尹賀陽親王兼再任（同上）六年正月四品彈正尹惟喬親王任之（同上）十年正月四品惟彥親王任之（同上）

十四年二月四品惟恒親王任之同上十八年二月彈正尹惟彦親王再任同上元慶四年十一月二品行式部卿時康親王兼再任同上八年三月四品貞固親王任之同上按仁和三年五月為彈正尹太守如故と見えたり此後昌泰元年十月小常陸太守貞數親王行ひ扶桑略記按清和皇子皇統紹運錄源氏系圖並云延喜十年六月薨一代要記云十六年五月薨其餘貞真親王日本紀略扶桑略記皇統紹運錄云清和皇子承平二年九月薨元長親王源氏系圖陽成皇子貞元元年九月薨代明親王花鳥餘情醍醐皇子按日本紀略云承平七年三月薨昭平親王紹運錄村上皇子永觀二年薨髮るゝ皆常陸太守と稱ゝ史傳闕略して其補任の年月知るべからず按日本紀略一代要記並云盛明親王醍醐皇子康保四年親王たり寛和二年五月薨とある殘尊卑分脈は歷上總下野太守と云ふ事を記せり是太守の物ゝ見えたる終をふる為一代の制寛和まで行はれしは八百五十年ゝ及ひしゝ後興國中護良

親王の王子興良親王小田大寶等の城ゝ六歲の間賊軍と禦き給ひ城陷て吉野ゝ歸らせられし後も猶常陸親王と稱ゝ事往々文書ゝ見えたれども太守とゝ事異なり

國造

續日本紀神護景雲二年六月戊寅以掌膳常陸國筑波采女從五位下勲五等壬生宿禰小家主為本國國造と此古昔一郡を以て國造たりしゝ同じくらゐ常陸國造となりしゝ此項は食封ゝ國造田とゝ賜はりけん按續紀原文云六月戊寅以從四位上外衛中將兼造西隆寺長官參河守勲四等伊勢朝臣老人掌膳常陸國云尚掃從五位上美濃直玉融掌膳上野國佐位采女外從五位下上野佐位朝臣老刀自並為本國國造これ小家主老刀自二人は國名殘舉げれども常陸

上野の國造なりし事疑ふ所なし老人玉融ハ其姓まて本國を知る
へし同書紀直摩祖為國造出雲臣益方為國造と同例之小家主等三
人ハ女子にて國造となれし其例亦多し且此小家主か出處と全く
同し様なるは寶亀二年十二月丙寅從五位上因幡國造淨成女為因
幡國國造とある是なり此淨成女是より先正月從位五下に叙し二
月因幡造の姓を賜ひ十一月又從五位上に叙し此に至て遂に真國
造となりしに類聚國史に延暦十五年正月壬申正四位上因幡造淨
成女卒元因幡高草郡之采女也天皇特加寵愛ともいはれ此人桓武
の寵を受て厚恩に霑ひたる事小家主は是より先元年三月筑波郡
人從五位下壬生連小家主賜姓宿禰とあるに能似たり國造田の目
は逸史延暦十二年八月解を擧て延喜十四年八月格を引たる又續
後紀承和元年十一月にも見ゆ本國に此田ありし事ハ後に引へき
と見て知るへし　政事要略延喜十四年八月民部省符に諸國國造田凡四百
十一町の内本國十三町ありしを當時小家主か賜ハりしものなる
へし
按此民部省符ハ贅力婦女田闕郡司職田等と共に返進し其地
子稲を以て正税に混合せし之抑國造を神武紀を以て首とし

國造本紀諸國國造を置かる始を擧たるも成務の御時に定賜とあ
るもの最多し是を其本紀に撿それは令下諸國以國郡立造長とも載た
り三代實錄貞觀三年十一月詔に孝德天皇之世國造之號永從停止
とあるにつきて此御世に國造ハ盡く廢されしと思ふは誤なり此は大
化二年正月改新詔其一曰罷在昔天皇等所立子代之民處處屯倉及
別臣連伴造國造村首所有之民處處田庄仍賜食封其二曰其郡司並
取國造性識清廉堪時務者為大領少領強幹聰敏工書筭者為主政主
帳此二條を見れハ其一ハ國造の領せし土地人民ハ皆公に歸せしめ
故に食封を賜はり其才幹ある者ハ多く郡領主政なとになりしなれく
國造を盡く廢せしにはあらすそれ故にまた國造の事孝德以後にも
史にも往々に見えたり但祭政維一の制なれは土地人民を失ひし後
ハ専ら祭祀の事を以て其職とせる様は續紀大寶二年の文及出雲
國造の事を以て知らるされと此小家主淨成女等ハ其身後庭に奉仕せ
れは祭祀の事まてハ關らさりしなるへし此頃道島宿禰嶋足の陸奥
大國造となり寶亀中近衛中將兼相模守を以て蝦夷叛亂の虛實を
探り延暦中和氣朝臣清麻呂の美作備前國造となりしも其高祖より
以下四世まて亦其國造を贈られしも皆大勲勞の上の特
恩なれハ尋常の流とは同しからさる事想ふへきなり

盛衰

本國の盛時ハ和名鈔の鄕名多きを以て上世戸口ハ多紀と推知るのミ承平五年二月平將門ノ亂起テ數戰爭ヒノ天慶二年十一月國府三百餘家と燒亡せられしヨリ三年二月誅ニ伏するに至るまで五歲の間騷擾ヘ當時治平ニ拙たる民俗ハ俄ニ叛逆ニ遇ひ上下驚動するノ中ニも賊衝ニ當まる境域ハ特ニ衰弊の端となりしや拾芥鈔ニ天慶八年九月大外記三統公忠ノ當時諸國乃貢の善惡と品定して上中下無品麁不貢の六等ニ分ちしるし本國ハ二總二毛と共ニ第五等の麁と定めしハ亂後の凋瘵知るつまふり西宮記

北山鈔並云應和元年藤原為忠為常陸介請曰如常陸國凋弊已久在任四年間不能全濟正稅及調庸率多願二年以上辨濟則准四年皆濟例以蒙加階之賞於是公卿議奏辨濟三年已上許賜一階その後長保寛弘の頃となりてハ遂ニ任限四年ハ間ニ能二年ハ輸を納ハ則其加階の賞と蒙まるとと北山鈔又こまと記するを幾もなくして平忠常又下總ニ反し源頼義本國ノ兵と進む其亂長元元年ノ四年ニ及つて其後ハ天下久しく無事なりしかハ凋弊も稍蘇息をノ養和ニ志太義廣の亂あり治承ニ源頼朝金砂と攻し戰ひきとも何きを旬月ニ過すして其事定りしかハ大害ハ至らさるべし建武ニ

ゑ正平ニ及ひてゝ賊徒猖獗志ゝ〳〵兵革と動〳〵元中ニハ踰年の間男體山ゝ兵あゑ永享より後ハ坂東八國其亂麻の如く郡豪割據ヤ小雌雄戈爭ふ本國ニ佐竹小田の鉅族ありて各こ社ニ黨屬〳〵結城宇都宮千葉岩城伊達那須等の鄰敵と攻擊やゝゝ民衆の塗炭特ゑ本國のみふらゝ天眞人と生〳〵否變〳〵泰となり天正十九年以後ゑ四海悉く洪恩ニ浴〳〵農商黨各其業ニ就き其生と樂む事と得たり

常陸國郡鄉考巻一　終

常陸國郡鄉考巻二

新治郡

風土記云古老曰昔美麻貴天皇崇神駅宇之世為平討東夷之荒賊原注俗曰阿良夫流甫斯母乃遣新治國造祖名曰比奈良珠命此人罷到即穿新井原注今存新治里隨時致祭○按風土記巻首又此事を載ゝ倭武の時とゝゝ其文巻一ニあゑを國造本紀云新治國造志賀高穴穂朝御世美都呂岐命兒比奈羅布命定賜國造これ又成務の時とゝゝ名亦少異其水淨流仍以治井因著郡號自甫至今其名不改原注風俗諺曰白遠新治之國○按萬葉集上野國歌志良登保布小新田山乃ニ同〳〵風俗諺とゝるハ以下も皆枕辭ゑゑ新治井の事ハ下ニ出きり是郡名の義國造の由なり續紀神護景雲元年三月乙丑朱郡大領外從六位上新治直子公獻錢二千貫商布一千段授外從五位

下、延暦九年十二月庚戌授本郡大領外正六位上新治直大真外従五位下、居官不怠頗著功績故有此授焉、とある二人々比奈良珠の後ホ

ミ姓と賜ひしが改制の後猶郡領ともふわしホやあるむ

四至　風土記云、東那賀郡堺大山、按今木葉下大槁等の山南白壁郡、後真壁郡西毛野川、後鬼怒河又絹河北下野常陸二國之堺、即波太岡、按今其名と失ふ笠間の北ようと西小栗まで山壑連續二國を界ちろ浅總ちハ大小山と稱し又各處ホて別ホ名あり是波太岡ノ又按風土記筑波郡條ホ逸文の四至ちりて其民白壁郡四字ハ本郡ホ移し〻下真伊讃等ようもの方位とそ〻〻其餘東筑波郡南毛野河西北新治郡十三字ハ全白壁郡の復出ノ

和名鈔郷十二

坂門郷　今茨城郡飯岡村坂戸山、宇都宮氏族小宅氏堀、ある是郷名の遺そ

其近地本郷村即坂門本郷ホて中山信名曰佐竹東義政女法名冷松院ノ天文中書寫ちる日光三所本地物語と云ふ草紙の末ホ常州西那珂郡坂戸郷飯岡村と識せり此項まても郷名と傳へふり按冷松院ハ小宅氏の妻ホて天文十七年没其墓今飯岡に存ス一木文書應永卅年足利持氏感状ホ坂戸合戦とりまハ戸字茂用ちる古き事ノ按此邊中世中郡といふ解後ホある後西那珂郡と稱ちる草紙末書ホて見社々沿習ま従ひ〻〻元禄十五年西那珂廢しと此郷大幡と同く茨城郡ホ入れり

竹嶋郷　今真壁郡高嶋村是なり信太郡高来郷風土記和名鈔後竹来ホ作ま茨城郡高原尊卑分脉今竹原となまる類ホて此郷五行川と一小流との間ホあて三面ホ河ある故ホ島とそちふ

沼田郷　今真壁郡野田村是〻其隣野殿村ハ旧沼田野ゆゑ〻〻弘安勘文ニ茨城郡沼田ゆゑも今新治郡野田村といふ皆車濕ゆゑの名ゆゑ

伊讃郷　今真壁郡伊佐山村是〻東鑑伊佐為宗ゆ地ゆゑ弘安作田勘文ニ北條伊佐とあり此地を中世伊佐郡又伊佐庄ともいふ為宗曽孫伊達行朝祖先の舊地ゆゑ以〻延元興國の間六年篭城〻て勤王を〻て處なり　按新拾遺集ニ常陸國ニ侍多ゆゑ時ゆゑのそそ田井ニ住則ニ見とゆゑ此城に在て讀ゆゑ伊達系圖云行朝二階堂行朝と同藤原ゆゑ故和歌集ニ〻朝村と稱して別を示に　藤原朝村ゆゑ〻〻と思ひ〻程ニ筑波根今近地卅五村を土人伊佐庄と云ひ傳るハ古郷中の地か

ゆゑ

博多郷　今真壁郡羽方村是〻博多ハ端濕ゆゑ　按筑前博多も義同　竹島の北ニ在て水流ニ傍ふ故に名なり　按東鑑治承四年小栗御厨ハ田舘とゆゑ八田ハ隣地ゆゑ屬村ゆゑらんと當時已に小栗保中ニ入て御厨とゆゑしと見えたり黒川春村曰ハ田を博多の音便かまゆゑ其郷を分ちそかゆゑ唱〻にや

巡廻郷　巡川誤川古〻ニ作る齋宮式賀茂〻あり川廻川曲同續紀云神護景雲二年八月下總國言天平寶字二年本道問民疾苦使正六位下藤原朝臣淨辯等具注應疏鑿毛野川狀申官聽許已訖其後已經七年得常陸國移曰今被官符方欲掘川尋其水道當經神社加以百姓住宅所損不少是以具狀申官委定莫掘為便頻年洪水衝決

日益若不早為疏鑿恐渠崩川壅一郡口分二千餘田長為荒廢於是仰兩國疏掘自下總國結城郡小塩郷小島村達于常陸國新治郡川曲郷受津村一千餘丈其兩國郡界亦以舊川為定不得隨水移改こ川廻川曲同地ゐて其訓ハ和名鈔安房安房郡河曲音加波和も亦証そゝ〳〵此郷下真ゑ隣ゑ毛野河の曲ゐる彼以て此名と得たゑ史ゐゑ兩國郡界以舊川為定とあれと此時墾開して地勢變き〳〵故ゐ郷中の地多く下總ゑ入るゑや將門記ゐ將門傳聞此言以承平五年十月廿一日忽向彼國常陸新治郡川曲村とあるハ此頃已ゐ降ゑて村とゐしなる歟〳〵 按其後此郷中と思ハゐ〳〵地多く下總ゐ隷ゑ平家物語ハ

島の戰ゐ平頼盛と擊ゐゐ本國人土屋小三郎吉安異本泥屋ひち屋ゑ作る今下總豊田郡ゐ在て本國と界きる肘谷村吉安ゐ住所かる〳〵永享冨有注文ゑ下妻庄古澤とゐゐも今豊田郡ゑ其近村大園木村ゑ伊達氏筑波郡吉沼大砂等と共ゐ併領きる印見ゑゑ是も旧本國ゐ隷せゐ地なるに似たり 按續紀ゑ今の絲繰川を掘る事ゑり 按毛野川又絹川ゐ作る和名鈔下野河内郡衣川兵部式驛馬衣川あれハ毛野川の轉ゑ〳〵ゑ古き事ゑ絹川ゐ東なる本國の川と子飼と云ふも衣川ゐゐ負たる名と見ゆるゐ衣川ゐゐ掘通して子飼ゑ入ゐ流なゑゑ絲繰とハ名つきし續紀の頃ゑ別ゐ名ハなゐる歟〳〵子飼渡ゑ將門記承平七年八月ゐ見ゆ小塩郷ゑ今其名ゑ失ふ 按和名鈔小埇ゐゐて小塩なり埇ゑ埇誤音曾祢かる〳〵と云或云小塙誤然とも其地小島と距る遠ゐ過く今下妻對岸ゐ本郷村ゐるゑ是ゑ小塩ゐ小埇の本郷なる歟〳〵

小島村ゑ現存ゐ 按今豊田郡ゐ隷ゑれとも豊田岡田二郡ゑ古廢置あゑし事式ゑ見ゆきゑ此頃ハ結城郡と見ゆ近村松岡の結城郡ゐり豊田郡ゐ隷ゑれとも豊田岡田二郡ゑ古廢〳〵ゑ東鑑ゐ見ゑ〳〵り 受津村ゑ今筑波島村ゐ隣れる數須村ゑ

て其舊名音に遺きるなるべし下妻土人の傳說に絲繰川は傍に
比氣村々川を守ちし時民家を他所に移をしより其趾へ後立ふる
村なり人家を佗所に引たる趾ふる故に比氣と名つく今坂井村
に原近津明神は古比氣にあるし社ある淺其時坂井村へ移をり
故に後又比氣なる對岸ふる下總柳澤村とえに近津の小祠を建
て村の鎮守とす二村旧一村なれはこと此說續紀經神社とある
ふも能合をる比氣に鄰きる堀篭村も疏鑿の時ふるの名に似た
る按將門記堀越渡とあ原を此地の事にはらさるるう小嶋より子飼川に至る今一里に近
き里程なれは一千餘丈とあるふも稱つる

月波郷　原音都木波今真壁郡筑波村是にて藥王院下妻地圖應永の物
ふを筑波島とあるを子飼の西岸なる地こ按古音郡名山名と同しこうゝ云今は混稱をる
大幡郷　今茨城郡小幡村是こ按古茨城郡亦同名の郷あるを今新治郡小隷しに小幡と改む　此地
中古中郡に屬し文祿西那珂郡に入る元祿十五年茨城郡となる
新治郷　今真壁郡古郡村是にて古郡家の地なるを礎石猶存し多く
敗瓦と出をる處あり時に菊花紋の瑞瓦茂出をるとつふ又多く燒米とも出をるこ
類聚國史弘仁八年十月新治郡災燒不動倉十三宇穀九千九百九
十石とあるものより此地郡家にて郷の事をも兼しなり本國に
其例多し按出雲風土記楯縫郡楯縫郷即屬郡家と云ふに同し今村中に諸病に驗ある靈泉

とく土人尊崇する清水平地の草野中より湧出る者あり是
風土記の新治井ふる事疑なし開國の名蹟人の知る者多ハ歎
すべき事ならずや

下真郷　今真壁郡當郷村ハ往ゝ猶下妻と稱ゝ全郷の體新治郡
の南ふく西毛野川ふ臨ミ東ふ大寶湖あり一郡の下方ゝ
ゝ地なる故の名かり大寶湖ハ風土記筑波郡條云郡西十里在騰波
江原注長二千九百歩廣一千五百歩以下略之萬葉集登筑波山歌新治乃鳥羽淡海と
る皆此湖の事ゝて騰波鳥羽並ふ妻ゝく妻の江湖と云ふ義ゝり
といえり按風土記騰波江條筑波郡の下ふ在ゝ其上ふ真壁郡の四至とも復出したれハ錯簡とをんも不可かしさまと

西と指ゝる方位の當ゝる筑見往ハ葦穂山と新治郡ふ叙ゝる類
なゝしゝや原略本なゝ詳ふ知るべうら云伍十里ハ何ゝ
も廿里の誤ゝ筑波新治の郡家共ふ大寶湖ゝゝ三里餘の處か
ゝ若此條と本郡ふ移ゝ西茂南ゝ改めゝ十里と廿里ふ改めさ
れハ方位里程共に稱ゝに萬葉集ふ草枕客之憂乎名草漏事毛有
武跡筑波嶺爾登而見者尾花落師付之田井爾雁毛寒来喧奴新治
乃鳥海淡海毛秋風爾白波立奴筑波嶺乃吉久乎見者長氣爾念積
来之憂者息沼とあゝさて師付ハ風土記茨城郡の下ふ信筑とあ
る地ふて筑波の東ふ在り今其地新治郡とふゝる茂以ゝ鳥羽湖
をも其近地ふ索ゝ世人衆訟息まに今能古今の沼革を考ゝ全首
の意味をも悟るゝ筑波ゝゝ東北ふる師付の眺望已ふ終ゝて
西顧ゝる故ふ新治乃の詞を置たしゝに其方位茂定めゝるゝ共
ふ一方の眺望ふらんふゝ其長二里八町餘二千九百歩廣一里五町餘
新治乃此詞を榊原由ふし
一千五百歩ふゝしも今ハ四邊ゝゝ貌開して新田となりぬれゝ繞ふ
其半を存ゝるもいふゝし此湖白河文書興國藥王院古圖應永ふ大寶

の名見へ〳〵れとも多賀谷家譜ハ平沼と稱ス　按今平沼新田あるも此名よ
り名付し〳〵　湖傍の八幡宮と大寶八幡宮といふうち湖の名ハ負へり
大寶年中より
の奉祠と云ふ　東鑑建久三年ハ下妻宮とある是かるへし　藥王院
應永中此別當〳〵〳〵文書數通あり　按此郷其初大掾維幹二子為賢ハ後下妻清氏地頭たり其
後又大掾直幹二子下妻四郎悪權守弘幹地頭なり〳〵北條義時
と中悪し〳〵く建久四年ハ亡ひ夫より小山族下妻四郎長政地頭ハ
て其孫修理亮政泰ハいたり延元より八幡宮側の城ハ據り勤王
し興國ハ春日中將顯時戍助り興良親王と奉し關宗祐と應援し
り湖の東西ハ在て賊軍戍捍禦し事前後六年の艱苦と盡し其
四年冬兩城共ハ陷り皆節に殉へたり後康正中多賀谷氏湖の南
ハ城戍構へ慶長の初まて居へり〳〵ハ關ハ原の事定まり家亡
ひたり其城ハ今井上侯治所ハ處かり又本願寺老臣下間氏系圖
ハ其先此地の人ハて親鸞本國ハ在し時ハ屬し〳〵といふ又栗山
光明寺所藏ハ下間利之と有文書あり永祿天文項の物ハ

地の人ハ似たり子四月中
のみハて其年紀詳ならす
巨神郷　今茨城郡大郷戸　按鹿島宮北ハ神門原あり音郷戸ハ同し大郷戸ハ大神戸かり稲田等の
地と萬葉仙覺抄吾岡之於可美爾言而令落歌の注云常陸風土記曰新治驛家名曰
大神所以然稱者大蛇多在因名驛家即此地の事なり　按安侯より下野ハ至る
の驛なり〳〵ハや兵部式ハ此驛ハきた早く廢せ〳〵と見ゆ　稲田神社あるも大蛇なりしうち祀
まるハやあらん　按紀闇龗此言久良於箇美豊後風土記大蛇と大
神とハ續伽婢子といふ俗書ハ此地ハ大蛇あり
し戍鹿嶋神の罰し給ひたるハ載なり又地ハ瓶嶺なるを稲田
社ハつきて出雲の故事ハ似たる傳說あり八瓶嶺の名ハ笠間時
朝ハ歌のえしうきまも見えたり　中世此郷笠間郡ハ入ル　笠間家朝申狀　文祿より茨城郡
とかれり

井田郷　今茨城郡北邊の飯田村是かり（中郡同名の村あり）鹿嶋郡伊島とも
今飯島村といふは同し此地も中世笠間郡ふくと文祿茨城郡とふ
る笠間ハ風土記自郡以東五十里在笠間村とある是ハ（風土記全文ハ真壁郡ふ出す）

右十二郷其八郷ハ今真壁郡となる坂門大幡巨神井田の四郷を茨
城郡とかる今の新治郡ハ寸地も古郡の地ふ非さるなり

神名帳新治郡三座（大一座小二座）

稲田神社（名神大）　今稲田村ふたり（社說云奇稲田姫ぬ祭る其由巨神郷の下ふ在る）神階を従二
位なるへし（按黒河春村曰類聚國史仁壽元年正月詔天下諸神有位無位と論き云正六位上ふ叙せらる其後貞觀元寛

平九天慶三永保元永治元治承四元暦二建仁元弘長元建治元明
應十まそ九十二箇度天下諸神之贈位の事ある諸書ふ據て考へ
侍るへと因て今仁壽ちり推筭をれを従一位ま昇る給へる春村
又曰拾芥抄永承ム年宮咩祭文ふ掛畏支宮咩五柱笠間乃廣前云
執政所抄天治二年同祭文ふ掛毛畏高御魂命大宮津彦大宮津姫
大御膳津命大御膳津姫五柱乃皇大神乃廣前ニ申立申乃笠間乃
大刀自ふ申給久ゝとある笠間も稲田神社ふ由ちる者かる又越
前坂井郡加賀石川郡共ふ笠間神社ある又實方集まあめにはす
うさまの神相模鎌倉郡地名續紀人名笠間ちる其義いまと考ひ得云　建長項笠間長門守時朝其子
左衛門尉時景當時の名匠八人と各和歌十首つゝ詠一百首と
かゝ此社ふて披講をり（其歌新和歌集ふある）弘安勘文稲田社十七町小と
ちるを當時の神田ふや

鴨大神御子神主神社　今加茂部村ふたり（按坂門郷かるべし）文德實錄嘉祥

三年六月己酉、詔鴨大神御子神主玉神、列於官社、按實錄誤あり青山延彝廿八社考云、相傳此社、祭賀茂大明神、然據崇神紀、天皇七年、數有災害、於是、天皇幸神淺茅原、卜定於八十萬神、適夢神人自稱大物主神曰、天皇勿憂國不治、若以吾子太田田根子命祭我、則天下平、天皇乃布告天下、求太田田根子命、既而得之於河内茅渟縣陶村、即為神主、祭大物主神於御諸山、令式曰、御子神主、則為太田田根子命無復可疑、烏又出雲風土記意宇郡賀茂神戸條云、所造天下大神命之御子、阿遅須枳高日子命、坐葛城賀茂社、此神之神戸、故云鴨、ご社御子神高賀茂神戸とも単に賀茂神戸と云ふ此地の賀茂部なるも同し近地に太田村あるハ此社の由にや太田ハ新編鎌倉志明徳二年足利基氏の文書に見ゆ今大田に改む此社記棟札等に據ハ寛平九年丁巳始て臨時祭を修をしよりまたく勅使あり康平五年壬寅源頼義陸奥を討つる時祈誓し治暦四年乙巳八月賽報の造營ありて建仁三年詔綸旨の宮たりまた永承五年始て神官を置く白河鳥羽二帝の綸旨後醍醐天皇元亨三年毎巻尾に御諱を署し給ふ大般若經を寄らると云ふ其餘源頼義北條時頼ゟ寄らりとのふ品々足利春王丸結城蕾城の初祈願状なとありまた明徳三年熊野山願文に連署せる加茂介宗實嘉吉元年結城落城の首帳加茂部加賀守ハ此祠官なるへし元来加茂ハ特異の御崇敬にて和名鈔にも賀茂鴨部と稱ある郷諸國に廿所あり百練抄に寛治四年七月廿三日、賀茂上下社、被奉不輸田六百餘町、為御供田、又分置御厨於諸國、東鑑元暦元年よ賀茂神領諸國四十一箇所とも見ゆ此地も其御厨なりしにや

神階ハ明應に至りて正二位之按無位ハ仁壽元に皆正六位となり寛平九ハ大社のみ贈位ありしなきをあらいふく下これに倣え

佐志能神社

今笠間城中にあり三白權現と云ふ按旧井田郷なるべし續後紀承和四年三月戊子、佐志能神預官社、以特有靈驗也、按姓氏錄佐自努公豊城入彦命孫大荒田別命之後也、佐代公上毛野朝臣同祖、豊城入彦命之後也とあるて下毛野朝臣とも同族なきを毛野の近地に豊城入彦命を祭るまん笠間綱久文明九年佐白三社再造棟札佐白三所大明神となり後天文永禄の棟札も佐白之三白とも近世改めしゟ三所とせ阿武權現旧阿武山に祭まるといふ黒袴權現に聖權現の三神之神名ハ其像によりて名つけしもの祭神亦知庵う

ら神階ハ上ニ同じ〜〜笠間城記ニ阿武山ニ社ありしと宇
す
都宮氏笠間を領し時今地に遷さりと云ふ〻天正十七年笠間
綱家亡ひ玉生美濃守高宗城代として城を守りし時浅云ふ

庄保　私稱郡　川

下妻庄　弘安作田勘文下妻庄三百七十町、嘉元田文同、吉田藥王院
大寶八幡別當職徳治三年北條宗宣の補任状に応永廿五年に
至る數通の譲状に皆下妻庄とあれども誰人の庄園かりしや其
傳なし　按筑麓雜記に此庄司を飯沼平十郎範遠といふ其曾孫左衛門親範の時多賀谷氏の為に亡ふ　税所文書
應永十二年　下妻庄造谷郷今村名　鹿嶋冨有注文永享七年下妻庄内幸井郷今坂

井村　山宍郷未詳　古澤郷今下總豊田郡　大串郷今村名　黒子郷同上　西廣野今筑波郡西高野村
今賀嶋村今筑波郡今鹿島村　砂塚村今かゝ筑波郡大砂村ニもやされと隔遠ニ過るニ似るなとある
況見て其地境の大概を知るへし　按庄々崇峻紀に大連守屋の田宅茂四天王寺に與る田庄とせ
し事なり　西大寺資財帳寶亀中の物示庄あり

村田庄　東鑑文治四年八條院御領村田庄、又後宇多院御領目錄に
此目錄ハ後二條の項成し　安樂壽院領常陸國村田庄九條前關白　同下郷土御門中納言と
なるゝ九條土御門二家へ領家職と譲り給ひてそき茂安樂壽院
へ寄附あり〜〜下郷を東鑑建久三年に村田下庄ある是り小山政
光村田を領し二子安房守朝村に傳え村田氏となり後三世を安

房守政盛と云ふ南北朝頃の人と弘安勘文村田庄二百六十丁、嘉元田文同拾葉抄に村田吉間藥師堂ともたりて（抄ハ黒子千妙寺亮尊の集かり）今吉田吉間二村茂専村田と稱に（按土人筑地海老江下川中子大林陰澤五村と合て村田庄と故ふ今も此七村吉田の鎮守を祭るといふ村田氏墟ハ吉間にあり）水谷家譜に河内村田六郷とあるに大林以上の六村ふして陰澤ハ稍隔たて下方の地かまた下庄なるへし（按文祿ふ西河内郡と置くも河内の旧稱ま因るへ）

關庄　後宇多院御領目錄ふ蓮華心院領常陸國關庄あり（按地茂寄たるも猶目錄ま載るハ寄附の地も領家の得分あるものかるに因ると云ふ前の村田を同例かを此目錄嘉元四年の院宣あるを禪讓の後徳治頃ふ成しものかり）弘安勘文此地茂西郡南條とあるて庄の目ふ非ハ御

在位故ふ以まゝ庄ハ立さりしと此南條を其嚮ふを私ふ關郡と（下關郡條詳なり）も稱それハ庄も其名ふ因まり梅松論（建武三年筥根竹下合戰の段）結城の恩賞とゝ此地を與えられし茂見ま八關三十三郷の地盡く庄とかりしふハあらぬ（按本國の内吉田郡吉田庄久慈郡久慈庄佐都郡佐都庄の類皆郡と稱そる地の内ふ庄ゐるなり）

附　御領目錄前ま次て大宮院御領之内西御方常陸本庄（屬小路入道中納言）

といふ一所を載す今其地詳なりしこゝふ舉て考索を待つ

中郡庄　東鑑文治四年京都ゑりの状ふ蓮花王院領常陸國中郡庄年貢註文遣之とゐるを何人領家かりしゝ弘安作田勘文中郡庄

三百八十二丁六段嘉元田文中郡庄二百八十三丁一段小（按其多小あるハ詳かならず）鹿島大宮司文書（寛元）中郡庄礒部郷筑波潤朝申状（享徳四年）常州中郡庄木所城（按拾葉抄城所を作る）拾葉抄中郡庄門毛佐竹家士證文鈔中郡庄福田郷とあり

附鎌倉大草紙ハ永享十一年十一月足利持氏の亂ハ其二子春王丸安王丸本國ハ逃き遂ハ結城ヘ籠城ヲ事ヲ載れるも筑波潤朝享徳四年二月の申状の詳かるに如うなる（按此事諸書多く日光の故事と混ず筑波山中禪寺知足院と日光山中禪寺と殘誤混ヲ〻ハ潤朝ハ筑波別當明玄ヶ後ヲ〻小田氏の族ヶ但永享記ハ妄の禪院うしこの律寺ハ一夜二夜殘明〻と〻あまた〻春王安王の日光ハ至ヲ〻事もなり〻ハや）申状云永享十一年十一月

一日當大御所様（成氏）若君様（春王安王）於小八幡社頭警固申、自其而扇谷（江）御出次我等之手計供奉申、其時當大御所様御守ハ、家人又次郎男参候（成氏信濃ハ走る殘云ふ亦大草紙に見ゆ）十二年三月四日、於常州中郡庄木所城、若君様被起義兵（即日梁田出羽三郎景助を賀茂部社ハ遣し祈願す其状今社中ハ藏云）其時者、叔父熊野別當朝範以親類等談合、先一人則四日、馳参令供奉、亡父玄朝者同十三日、伯父美濃守定朝同伊勢守持重其外親類等引率、而木所（江）馳参（按木所城今詳かならず云）同日小栗（江）御出令供奉同十八日同國伊佐御出令供奉同廿一日、結城中務大輔氏朝不黙先忠厚恩存弓箭之隙義奉入我舘、玄朝親類等御供仕致宿直警固、これよを以下

筑波氏の功状々小田氏譜ふ載つる伐見るべし

伊佐庄　永享記其目ひきとも外ふ證驗なし濫稱かるに似たり

小栗保　弘安勘文伊勢御厨小栗保三百二十一丁、嘉元田文同、これ

神鳳鈔常陸國小栗御厨内宮御領上分絹十疋口入三十疋三百二十餘丁とあるふ合きり按東鑑治承四年十一月源右大將頼朝常陸國府より鎌倉ふ歸る、路小栗十郎重成ゝ小栗御厨八田舘ふ入とあるハ此地まゝ重成ゝ多氣重幹ゝ四子小栗五郎重家始て此地の地頭ふ成其子重義孫重成ゝ重成十一世彦次郎助重康正中ふ至て亡ひしより

白河文書寶治四年小栗文書嘉吉元年等ふ小栗六十六郷とある小栗文書北方四十二郷南方廿四郷北方内河下十二郷の目あり其保かるべし按保ハ周禮大司徒ふ合五家為比使之相保といふより出とる名ふて拾芥抄ふ京都の内ふて十六町之内有四保と見ゆ後其名を諸國まてふ及ほしたるなり東鑑

鎌倉中保保と也見えたり

鶴岡文書應永卅一年上杉定頼寄進状ふ常陸國北小栗御厨ともの里按今其地ふ御朱印五十石の神明宮あり又近地金九村ハ永樂拾貫文深見村ハ壹貫文柴山村も拾貫文三村合廿一貫文水谷氏の時ふ撿地を除き貫高ふて内宮御領ゝ其初ハ岩淵二頭大夫所務なりし伐今久保倉大夫ゝ所務とかり其里正ハ伊勢より置く所りて其家ふ徳永式部少輔永井監物花房志摩守等の證書及久保倉伊織ゝ事書一通を藏して神領の公驗とる其事書ふ此地ハ頼朝の時那須與一宗高ゝ寄進ふく其文書あるし伐慶長九年甲辰火災ふ遇て燒失きりといふ御厨の遺たる事ハ失ひしふや

大藏省保　今市毛村ゝ說笠間郡ふ詳なり嘉元田文大藏省保六十六丁五段原十一段ふ作る今大淵以下の數を以て訂正をるべく内大淵廿六丁四段六十分片庭二十三丁九段三百卜石井原四丁九段大黒稲十一丁一段小こさき大藏省

領と見えたり（按弘安勘文誤あり故ふたたびに載せず下文笠間郡條参見して考ふべし）

關郡　東鑑寶治二年關郡二木奈利郷（今二木成村）梅松論建武三年（筥根竹下合戰の段）常陸關郡と結城（祐廣）小賜ふとあり本郷を郡の南地花田關本等の地と弘安勘文小西郡南條（關）百八丁五段三百歩とある是關郡かり（按勘文に新治一郡茂西郡東郡中郡と三分し西郡小て又二條に分ち其南方を西郡南條とも關郡とも稱し其北方茂西郡北條とも伊佐郡とも稱きり東郡を又笠間郡とも稱し中郡小後西那珂郡ともかきり其初を皆新治一郡の内小ての目かきり）此等の郡小私稱小して王室の制にあらず當時諸國に此類の郡名多きり習俗（按本國小てを將門記小吉田郡ある茂最古しとす東鑑佐竹の常陸奥七郡と領云といふも私稱の郡と數へ難く陸奥五十四郡も此類かり）

伊佐郡　伊達系圖常陸入道念西（宗村）住伊佐郡中村（按今中舘之其墳堂あり）北條九代記北條左近將監時國六波羅南方に居たり茂（弘安七年六月）關東小呼下し伊佐郡に流す（十月被殺）鹿嶋護摩堂文書（應安）伊佐郡平塚郷（今村）（ひらかとゐりて伊讃郷と本郷ともに）弘安勘文西郡北條（伊佐）九十九丁一段六十歩内（以東四十八丁大以西五十一丁半）とあり西郡北條とも伊佐郡とも稱せり（按勘文殘闕あり嘉元田文まて補へり）猶上條と参見べし

中郡　加茂社文書（建仁）中郡鴨部郷長福寺鐘識（正應二年）常陸州中郡長福寺（宗形氏時及藤原氏女の寄附かり）白河文書（興國）中郡城筑波潤朝申状（享徳）中郡木所城かと枚舉小遑なし保元物語源義朝の屬兵本國の人中郡三郎

なほ此地の人なるべし　按東鑑よも中郡氏あり其姓族名稱傳ハらす上鐘識宗形氏時其一世なるハ似たり興國中春日顯時城茂拔て其手兵を置くとあれ共中郡氏ハ此時ハ亡ひさるべし　弘安嘉元の田數ハ庄の下ゟ擧ゟ

笠間郡　親鸞繪傳笠間郡稲田郷、拾芥抄郡名笠間、按抄郡名此外數て茨城と秋津ハ考る所なし故ゟ別ゟ是茂擧ゟす　稅所所藏應永四年八月笠間孫三郎家

朝日安ゟ欲早被退寶戒寺三聚院當知行如元全知行笠間郡十二ヶ中

郷石井郷半分事殘半分者上御料所　稅所切手員數應永笠間郡十二枚十二郷配當の為こ此二通と以て笠間郡の十二郷なる茂知へし其目ハ吉原、福原、稲田、赤澤、野尻、本殿、大藏省保、大淵、黒栖、片庭、石井原、戸藏、こまこ之勘

文田文の二書と參考して其然る茂辨ぞべし　弘安勘文云東郡吉原四丁三段小、福原十八丁六段小、稲田社十七丁小、赤澤十四丁一段半鹿島神領、大藏省保五十一丁二段大按田文ゟ校それ〻此數誤あり下小辨す　大淵九十四丁二段六十歩、黒栖四十二丁五段、方庭四十七丁三段、石井原七丁八段、大藏庄五十一丁二段大按宇都宮系圖笠間族戸倉三郎時朝ゟり戸倉ハ今德藏ゟ大藏庄〻德藏の誤なる故其田數亦省保と重複ゟり　こ於十郷あり嘉元田文云東郡三十七町内、福原十八丁六段小、稲田八丁六十ト、本殿八丁一段半、野尻二丁二段、同大藏省保六十六丁十一反内按十一段ハ五段誤　大淵廿六丁四段六十歩、庄庭廿三丁九反三百ト、石井原四丁九反大、黒栖十一丁一

反小（按勘文田文の田數小差あるを今考ふ能はらず）こゝ本殿野尻と合さて十二郷と（按今ハ石井、市毛、大淵、福田、飯田、徳藏、箱田、来栖、木戸、吉原、稲田、福原、片庭以て十二郷なりと云ふ其内来栖を黒栖、木戸ハ本殿と箱田ハ片庭方庭と今片庭箱田分村されと曰一村なりと云ふ飯田を此項赤澤と併を福田ハ野尻、市毛を大藏、省保中の地なる事今の田高と勘文田文殘較計を終ハ其大氏と知るべし）又熊野參詣願文（明徳二年極月初二日判）小常陸國笠間郡住人福原常陸介朝宗、飯嶋七郎光忠（中西子息七郎三郎宗忠）安藤四郎國守（石井）平六三郎國安（黒栖郷）加茂介宗實と連署す（按福原今か土人相傳關戸、田上の遺と云ふ）當時の土豪と見ゆ今十二郷分て卅二村となれり（按親鸞遺跡記小笠間庄あるを伊佐庄の類まて濫稱かゝ）

子飼河　常陸國誌蠶養を作る和名鈔肥後菊池郡子養飽田郡蚕養八皆同義小て此地を絹川を隣まる故の名なを將門記便以八月六日（承平七年）圍来於常陸下總之堺子飼之渡也と見へたを總國風土記小を幸井川又前井川とあり（按總國風土記筑波郡の四至を西限幸田川とあり田を井の誤まて水守郷條前井川小作を永享冨有注文下妻庄幸井郷なる殘以て証とを〳〵即今坂井村小て地子飼の西岸小在と以て河の名小負ひたるものかり）河源兩派あを西派を下野塩谷郡西高野よりを起を高根澤赤羽等と經て久下田（西）安部所（東）の間小至り東派八同國芳賀郡君嶋の邊より發〳〵稍南流〳〵安部所の東よりを西派と合〳〵本郡樋口小入を下舘の東と過を川中子まいたる其以上殘五行川又勤行川とも云ふ又一派ハ芳賀郡の南邊小起を小栗の西と經

て川中子の東ふ〜ゑ五行川と合し流漸大ふかり始て子飼川と唱ふ高嶋博多二郷々小栗ようの支派と五行との間にあり扨南流して古新治郡沼田月波真壁郡大林伐界し坂井西と過て西より絲繰川を納き今筑波郡高道祖と東下總岡田郡柳原西の間と流き古河内郡と抱て下總豊田郡と界し其水海道と西箕輪樛木東との邊ふて屈曲し中世此處ふて絹川と合流せし事あり河内郡若柴の南まて下總相馬郡ふ入て布河の西ふて刀禰川ふ入る樋口より柴若芝まての里程十里ふ及ぶ〜此河灌漑の為ふ堰を設て開閉に秋冬の間ハ堰伐開て大船ハ道仙田小舟々河合ふ至る按總國風土記鮭鱒の貢あり今も秋月月鮭伐捕る事あきとも甚多らす

附録　貞婦

類聚國史天長二年三月甲子常陸國人丈部子氏女叙位二級終身免其戸田租用旌貞節也子氏女年十五適於同郷人勲七等新治直單經十八箇年夫死之後常擁墳墓朝夕悲泣雖經多年無變其志按續紀新治直子公大直二人ハ皆本郡大領今子氏女何郡人なる茂知らされとも單ゝ新治直姓かるを以てくらゝに附をを勲位を賜ひしゝ大少毅の類の人かをしう

常陸國郡郷考卷二　終

常陸國郡郷考卷三

水戸　宮本元球仲笏　著

真壁郡 風土記作白壁郡

本郡ハ風土記今本郡名四至のみと存それ〻建置の始知るふ由かし清寧紀天皇の御名ふりて白髪部を置う給し事ありき〻此郡も始其地ゝ見えつり行方郡條ふ新治國小筑波之岳と云ふ事あれハ行方の方ようゝ筑波を指んふゝ本郡其山背よあきゝ本郡茂しそ舉ゑまふ新治國と稱せるゝ其始新治と割て一郡とせしゝ疑ひなし白髪部姓と真髪部と改めしゝ續紀延暦三年詔ふ見ゆ給ゝ地名とも此時真壁と改めしゝ見えて諸國ふ真壁の地名多し按風土記ふ據ハ初ゝ白

壁と改め しふや 此國造ハ絶て見る所なし今昔物語康保天延の頃本國相撲の最手ゝ真髪成村及子為成あり長元中ゝ源頼信の平忠常と伐たる時河と渉りて先導したる真髪高文あるハ若や本郡郡司の族かりしう

四至 風土記云東筑波郡南毛野河按蓋方位の大概之地河ゝ至らば西北並新治郡

和名鈔郷名七

神代郷 今亀熊村是ゝ初神稲代かりゝ我地名二字の制ゝ稲字我省きて訓ゝ其義ゝ遺をゝと見ゆ和名鈔石見邑知郡淡路三原郡ともに神稲と久萬ゝ呂と訓す是ハ代を省きて訓ゝ遺をり國名

上下毛野ハ毛我省きて訓ゝ遺を原ゝ同ゝ訓と文字と我合せて地名の義知る亀なゝ神の亀ゝ轉をゝハ天武紀備後亀石郡と桓武紀神石ゝ作をゝ和名鈔も神石訓加女志ゝ萬葉東歌ゝ神とうめをよる多り本國鹿嶋郡神谷戸我烟田應永文書亀谷田ゝ作をゝ中郡池亀ハイ

あうみと呼ふ稲と久萬と稱そめゝ和名鈔糈米和名久萬之禰離騒經注云糈精米所享神也神代卷保食神の身ゝり生きる粟稲と取持く大神ゝ奉祭る人我天熊人と云ふ持統紀奉奠と久麻たてまつる風とうめを倭姫世記彼稲抜穂今抜而皇太神宮御前懸久真ゝ懸奉姓氏錄國栖條允恭天皇御世乙巳誤未年中七節進御贄仕奉神熊至今不絶按此神熊々神態の誤ゝ似たれと元神熊の詞あるゝを故誤か原我知るへし新猿樂記熊米と作

るふともあるは淡路神稲郷も文永の地頭注文ふゝ神代郷ふ作き
里能登國誌羽咋郡神代村訓加具美神代神社あり越後神代村も
同訓皆加美具萬の約へ越中神代村ゝこうしんと呼ふ筑後御
井郡神代訓久萬之呂和名鈔刻本神氏ふ誤ふ長崎ふ熊代氏ありり
下總海上郡神代郷ゝ今香取郡ふ入て上代郷と云ふ黒川春村曰
今内侍所の供米茂おくはといふときけは猿樂目近大名といふ
狂言にもおくまゑ詞あは又陰徳太平記ふ嚴島の御久米巻數と
あるも是なは按畢竟くはゝこめの轉訛ふ歟　此地弘安作田勘文ふゝ亀隈ふ作る關系
圖ふ族神代氏あは永慶軍記ふ真壁臣亀熊伊勢守ありり　真壁記ふ
作る皆此地の人ふ屋べし　長岡文書建武二年亀隈彦次郎入道闕所
事とあるも同地かり長岡も其近地の村　ハ上熊ふ
名ふあは大國玉神社と接き所ふきハ其神稲を殖し地ふや　按上總島穴神
社の近地ふも上代村あは是も神代ふて其神社の供米茂出きる所と云ふ

真壁郷　今古城村是之東ふ葦穂加波等の連山抱擁し一郡の中間
ふ在て形勝の地すり郡家ふて郷とも兼たるゝ出雲風土記郡家
擬此とあるの例なり　此地中世大掾重幹四子真壁六郎長幹居城して子孫天正中佐竹氏ふ屬し終ふ秋田ふ
遷る其西隣町屋村と今專真壁と稱し商賈湊集の地なり
長貫郷　今古郷村是かる亀し近く三郷と云ふ所あり　徳永村の内　曰別
ふ一村なりしといふ神代長貫新治の三郷出合ひたる地故の名
と見えり
伴部郷　今茨城郡友部村是之　古事記景行巻此之御世定膳之大伴部とある時其部伝置ある地かふへ
し本國の内此地名三所あは其一ゝ風土記久慈郡ふりしう今其地詳ならず其一ハ多珂郡ふあ歟　初大伴部かり

〻淺淳和天皇の御諱を避て改めしと見ゆ（續紀）諸國皆然ることなり（四天王寺御朱印縁起に相模足上郡大伴郷を和名鈔伴部郷なるの類其証なり）續紀延暦廿一年九月本國人大伴繼守ある人此地の人なり（按法隆寺古図の裡に天平勝寶八年常陸國信太郡中家郷戸主大伴部羊調布進物となるを它郡にも大伴姓あるべし）

大苑郷　今大曽根村にて弘安勘文已に大曽根と（按下總海上郡地図村土人いはく祇と呼ぶ苑を黒川春村曰古本新撰字鏡云埇壘三同胡甬反又碩字曾祢又云塙塙磽三同口交反平地土石交堅也曾祢也とあり て埇字の義とさきを曾根を石根の上略ふく平地土石交堅の由なりと余按後世字書に埇地不平也と注し播磨曾祢の松本國行方郡曾祢驛及此地ともに山脚に依て不平の地にいれを春村の説と地不平との義とも兼たれ〻甬甬互用は國書に多きなら以と和名鈔土佐長岡郡大曽訓於保曾祢とあれ〻淺其國今大埇字淺用ゆといふ下總結城郡小埇も字鏡に據を小曽祢なまとも續紀小塩郷と同地に似たれと其誤何ともとも辨しがたし）

大村郷　今大林村是かれ（按村は林の誤う又は後世村名の便に一字淺增なるまてをかきう何ともあれ古本郡の南地にて一郷を置く處きの所ふる淺以て定て此地とは云ふなり）

伊讃郷　今伊佐佐村是と弘安勘文已に伊佐佐とあり夫木集に

さく川とあるは此地の川なり（廻國雜記いさゝの橋も其川に架を原橋なり川淺櫻川又筑波川ともいふまた委しく出をり）新治郡伊讃と同字にて唱え異かは二地の遠うらぬ處なる淺以て別てる爲の後世のことさかれべし（按いさゝ川と隔て對岸は西郷谷村あれ〻此郷の西にある故の名と見へたり）

石七郷今伴部一郷は茨城郡に入り其餘六郷と古新治郡竹嶋沼田

伊讃博多川廻新治月波下真の八郷を合せて本郡の地なり

神名帳真壁郡一座小

大國玉神社　今大國玉村小在り　按神代郷かの原べし　續後紀承和四年三月戊子大國玉神預官社以特有靈驗也十二年七月辛未授無位大國玉神從五位下社傳大國主命及活玉依媛淺祭ると云ふ今八幡宮と兩殿之村中名水七井あり内甑井といふもの水最清冷ふして早歳も其井と渫それも必應驗ありと云ふ按式山城久世郡水主座山背大國魂神社伊勢度會郡大國玉比賣神社尾張中嶋郡尾張大國靈神社對馬上縣郡島大國竈神社なり上野佐位郡大國神社を上野神名帳小大國玉大明神と記せり此外大倭神社も大和國竈神坐玉神社ハ難波生國竈神なり神代紀天之國竈命なり古語拾遺生嶋是大八洲之靈なりそれあれハ大國玉の稱のみふて必大穴牟遅神かまとも定めうべし　神階ハ從一位あるべし　説新治郡ふあり　弘安勘文

大國玉社三十丁九段大とあるも當時の神田かましふや

式外贈位神祠

郷造神　三代實録仁和二年六月廿八日丙子授正六位上郷造神從五位下とあるも倉持村の神祠かまと云ふ　社記毗那良珠命武甕槌命大巳貴命建御名方命事代主命五神淺祭るといふ按倉持車持同訓に其名ふて考るに姓氏録云車持公上野君同祖豊城入彦八世孫射狹君之後也此射狹も即伊讃ふて本郡及新治ともふ此人治めし故ふ射狹君と稱し二郷の名淺負ヶ原程の功業ありし淺以も其子孫車持公此地ふ居て射狹君を郷造神と祭まるふもかきう本郡ハ本新治淺割る地と見ゆ毗那良珠命を祭れるも由あれとも其佗神を祭りしハ何如なる故ふや又按神階ハ天下諸神仁壽元年まで無位かるも皆正六位上と授けられ貞觀元年又各一階淺叙す迄ハ仁和二年も前位從五位下なるべ亀ふ今新ふ其位ふ叙もふハ其故詳ふらぬ因て神階の推筭ハ略せり　神庫ふハ

田知家小田持家等ら寄ふりと云ふ物を藏する弐見き八其先より世の崇奉たりし事知らるる（按郷造ゑ國造冊造の造と同義なる歟）

三枝祇神　三代實録貞觀十七年十二月廿七日丁丑授正六位上三枝祇神從五位下とあるハ加波山中宮なて其棟札ふ三枝神社と識しるすと云ふ三枝祇と社傳さいかつこを訓むとぞ（按加波山ハ本郡長岡小幡の東ふありて古茨城郡と本郡との界かなる其高筑波ふ亜ぐ葦穂ふ勝まる本宮中宮下宮とそ三社あり御朱印地百石と長岡村圓鏡院正幢院分領し中宮本宮と別當ゑ下宮ハ今新治郡大塚村ゑ別當あれとも御朱印地の配分ハなしとりふ姓氏録ふ三枝部連ゑ額田部湯坐連同祖天津彦根命十四世孫建巳呂命之後也とあるて風土記ふゑ茨城國造ハ多祁許呂命の後なると載たれゑ此祠ハ茨城國造が其境界なる高山ふ其祖先祭祀しふ爲し此山今新治郡なて ハ大増大塚狸内三村の西ふ連亘とり神階ハ是も貞觀元年一階弐加へしふゑ漏たると見えたり伊能頼則曰三祠とかりしゑ三枝の名ふる附會をしかる歟）

庄山岡川

真壁庄　鹿嶋大宮司文書（正和）真壁庄小幡郷宍戸一木文書（永享）真壁庄飯塚かしはらとも何人の庄園なるも其亡たる年紀土地の廣狹等も皆知るべからず

石田庄　今土人あざ石田と稱ゑる地本郷かふべし将門記ふ将門う驅役丈部子春丸ゑ姻家あるて石田庄ふ往来をる弐載されハ本國の庄なるハ最舊し和漢合運圖ふ大掾國香承平五年二月将門ふ戰負て石田館なて自殺をし弐載るも即此地なる（按合運ゑ元将門記

ふ採まふなる為〜然ともこれ今将門記
首頁殘闕して其事却て合運に存ゑ将門記其時の文ふ以其四日
承平五年二月始自野本石田大串取木等之宅至與力人小宅皆悉焼
巡殘闕又筑波真壁新治三箇郡伴類之舍宅五百餘家如員焼掃とあ
ま按石田庄其郡名なし且古新治郡沼田の邊亦石田なると今本
郡とそふものそ将門の下總石井營よりま便近の地ふて一日中
ふ三郡と焼くそ其地犬牙相錯をふふならされそ能そ因て本
郡と定めたり國香の孫維幹ま至ま て水守よ絲多氣ま遷ゐも皆
其近地なま大串ハ古新治郡なく今其村あり野本そ蓋今本郡の
南邊か沉向中寺の三上野是なる為〜獨取木そ知るへうらす
此庄何世誰人の地ふりなん後田中庄蔓延して併呑さられしふ
や今土人田中庄かましとまふ

葦穂山　風土記新治郡條末云自郡以東五十里在笠間村越通道路稱葦

穂山古老曰古有山賊名稱油置責命今社杜誤中在石屋歌曰許智多雞波乎
婆頭勢夜麻能伊波歸再母爲豆許母良奈牟奈古非叙和支母原云
以下略之○按此歌萬葉集事之有者小泊瀬山乃石城再母隠者共
雨莫思吾背ま作ま陸奥淺香山歌の前ふ載たま色川三中因て東
歌なまと云ふ然らそ小泊瀬ハ又此山の一名か原〜解者萬葉
の歌代以て大和國とそる其名高さよりま誤ふるべし又萬葉常陸歌ま筑波禰爲曽我比爪背面
美由流安之保夜麻安志可流登我毛左禰見延奈久無爪その外建保
百首ふも此山代よめ原歌多〜此山筑波の北背ふ接續して高さ
加波ふ亜く加波ハ又此山の北ま連ふりて二山本郡と古茨城郡
と代界さり古新治郡家より笠間ま往くハ此山と踰〜と見ゆ古郡
ふまハ八里程あま五十里と稱そる當まり今ハ足尾山ま作る

枳波郡久岡　萬葉集（未勘國雜歌）云、伎波都久乃、平加能久君美良和禮都（岡　橋　和）
賣杼、故爾毛乃多奈布、西奈等都麻佐禰（淵　在　夫　嬬　願）仙覺鈔ハ風土記ヨ據ハ此
岡本郡ハ行ヲ云ふされと原文ヲも載されヽ其處知うたし（按本）
郡東邊の山岡起伏の所ハ在しう

伊佐佐川　此川源浅古新治郡山口村ヲ發し礒部村ハ至りて櫻
川と云ふ後撰集常陸國ハ櫻川といふ川のあヲ堂さいて、紀貫之
常ヲ堂も春へよかまく櫻川なゝの花しそ間なくちる云
らゆとあるゝ此地なりといふ、又廻國雜記櫻川を渡ヲけれハ紅
葉うつれひて波ヨ映しけふと見ゝ道興准后、秋の色ハうつろひ
さても櫻川紅葉ハ波の花とそつつ〳〵ヲあふゝ貫之の歌ハとヲ
あるゝ更かりたしうハ本郡ヨ至ヲて此川浅渡ヲ谷ひしなう
南流して古郡の東ハいたヲ是ヲ東流して古真壁郡ヨ入ヲ神

代（西）真壁（東）浅歴て伊讃の西と流き伊佐佐川と稱ヲいさ〳〵（田國雜記ハ
ごめるゝ此地の橋なり）叔正東流して筑波郡ハ入ヲ其南北條と界し筑波山
ヲ堂の小流數條と受ると以ヲ筑波川（按關東古戰錄又筑輪川といふ）と呼ふ方
穗栗原二郷の北と過て（今ハ南條大氏新治郡ハ入れ）古河内郡大村の北ハて古
茨城郡と界し（今ハ南北とも新治郡なヲ）土浦城下ハて流海ハ歸ゑ（其城下の橋浅錢亀
橋と云ふ此下流ハ旧市中ハあヲし浅便利の為田中と疏鑿して流海ヨ達をヲといふ錢亀ハ東海の官道ゑ）

附錄

文徳實錄云齊衡三年十二月廿日、真壁郡言、生連理樹二也、一郡山
裡、兩處森然、分根合幹、異體同枝、或相連其間一丈餘尺、或交柯之上、

更挺好姿、是歳美作國苦田郡亦獻白鹿明年二月改元天安、免本郡今年庸免苦田郡調所獲祥木吏民二人亦量與爵賞又復天下今年半徭按今其樹の　ならし所絶と知るべからず

常陸國郡郷考巻三　終

常陸國郡郷考巻四

筑波郡按和名鈔周防佐波郡波音如馬　水戸　宮本元球仲笏　著

風土記云、古老曰、筑波之縣、古謂紀國、按南海道なると同く木の義ホや總國風土記本郡松杉柏樟の貢ら　美萬貴天皇崇神之世、遣采女臣友屬按僚屬の義ヵ筑簟命於紀國之國造、時筑簟命曰、欲令身名著國者、而後世流傳、即改本號、更稱筑波原注風俗諺曰握飯筑波之國○按色川三中曰新撰字鏡簟丁丹反笥とはきたゝ筑簟ハつくもこと訓キ〳〵ホやさらハ音訓とまま〳〵〳〵或云つくり〳〵握飯ハ山形ラヒ枕詞とたゝなるまし〳〵ハこの義ヵ何きホあれ古の附會かる𪜈　是郡名の由及國造の始こ景行紀菟玖波ホ作る國造本紀云筑波國造、志賀高穴穂朝成務以忍凝見命孫阿閉色命、定賜國造、これ崇神の後二百餘年ホあきハ國造も

一姓ハ々あらゝ云　按筑波私記云東山釋迦院々國造の宅趾なりと云ふ續紀、神護景雲二年六月、掌膳筑波采女壬生宿禰小家主、爲本國國造、となる々常陸國造とかゝ〜なきハ別ハ出さり

四至　風土記云、東茨城郡、南河内郡、西毛野河北筑波岳　按總國風土記本郡の四至東限金井岡ハ今新治郡金田岡の二村なり〜二村々旧一村かりと云ふ西限幸田川田ハ井誤其水守郷ハ前井とある同〜今坂井なり永享福有注文ハ幸井ハ作ゐ子飼川の事なり南限豊浦寄も子飼なり飼川と隔さ下總豊田郡なきハ豊浦の名もなりしかる〜〜北限大林ハ筑波山麓の林茂いふ

和名鈔郷九

大貫郷　今大貫村是之弘安勘文北條の内ハあり　按本郡ハ筑波川なり南條北條の

界茂成をゝ今北條村なる々其名殘なり旧名多氣と稱さ〜地なり

筑波郷　今神郡村是かる爲〜鶴岡應永廿四年文書ハ筑波北條郡家郷とかる々此地ハ式部式倭姫世紀三代格等ハ諸國神郡の目あり伊勢國飯高度會多氣安房國安房下總國香取常陸國鹿島出雲國意宇紀伊國名草筑前國宗像本郷も筑波神社の神田あるゆゑ私ハ神郡とハ稱さ〜ふらん弘安勘文筑波社五十六丁六十歩と見え多り治承中八田知家本郡三村郷ハ居り其八子法眼明玄筑波別當ハて子孫天正の末まて相續せり其族ハ筑波越後守伊勢守かと云ふもなり　按此地故城趾々別當知家子孫常陸守譲ゆて郡司ハ更なり筑波社の事ゆて〜とも兼行ひ〜と

見えて總社文保三年請文注文は筑波社三村郷地頭小田常陸前司請文一通とあて是村名の由と

水守郷　今新治郡水守村是之中世或三守尊卑分脉又水漏大揉系圖は作る將門記ふも水守營と云る所なるべし國香の宅石田うまを近し後平貞盛の子維幹居て從五位下ふ叙し水守大夫と稱云後多氣今北條村は徙て多氣大夫と云ふ嫡子爲幹多氣を繼き二子爲賢水守氏たり分脉系圖宇治拾遺物語今古墟猶存す此郷南條の首と按總國風土記本郷の下前井川鱒鮭浅貢云本郡極西ふ在て子飼川ふ瀕せふと以てし

三村郷　今小田村是之此地ふ八田知家の香火の地三村山極樂寺清涼院あり其地中三村山の守なる古瓦片浅出ぬ事あるべし府中總社文書文保三村郷地頭小田常陸前司とあり櫻雲記高師冬六月十五日興國二年小田近邊三村山ふ陣すといふを白河文書北畠准后の手簡ふも取陣於當城小田後高山と書給ひ僧忍性行状ふ建長四年極月四日到三村とあるふ浅元亨釋書ふ如常州宅清涼院と載て此地治承ふ八田知家八田朝綱子地頭ぶて子知重ぬ後ハ小田氏と稱ぶて見ぎハ郷ハ三村ぶて旧ふ小田と云ふ地ふらん古三村部と置る所うきり今の新治郡三村と云ふ村あ絡とも古新治と異なり此郷ぬ北條之按今北條三町ぬ此郷の屬地かる屋し其地三代格弘仁十二年本郡人三村部黒刀自たり按續紀新治郡人三村部綿女其郡ふ出

多氣山々松蕈を産する故の名なりといふ總國風土記三村郷の貢物松蕈なるも亦一証なり和名鈔菌茸和名多介とあれハ其説據る所伊勢多氣郡多氣郷音多介とあるて郡名の下ハ竹と伝ふ倭姫世紀ハ竹郡神名帳ハ竹神社かとなるを是ハ竹の義々見えたり

栗原郷　今新治郡栗原村是之南條なり　按寶永地圖ハ猶本郡ニセ知る所〜〜々故常ハ習ひ誤なる歟

諸蒲郷　諸渚誤今菅間村是之萬葉渚屋船之と訓ふを舟のこ訓ふ伊呂波字類鈔渚洲渚也と注ス筑波川の南南條ハ子飼川まて達する地と見えたり

清水郷　今新治郡稲吉村の内清水と云ふ所あり舊別ハ一村なり

〜といふ是郷名の遺ハ似たり其地清水院と稱する密寺境内に辨財天祠ありて祠後清泉湧出る事四時たえぬ炎旱の時ハ道曝沈潤ヲハ冥〜此泉ハ因て名を得〜なるへし是北條極東北の郷ふり

佐野郷　今永井村ハ隣まる本郷村是なるへし〜北條の内ハ　按永享七年冨有注文已ハ山庄内本郷とあれ〜古き稱なり此郷名〜遠江佐野郡同音さやう〜なる茨城郡佐谷と近地ありて混る〜ハ以て本郷と〜唱へ〜ふる所〜或云今新治郡上中下佐谷三村と統古筑波郡佐野郷なりと然きとも弘安勘文在廳名の内恒安佐谷廿七丁とあるて大掾教幹ハ弟佐谷次郎左衛門實幹其地頭かれ〜佐谷の古茨城郡なり〜事疑ハ〜

方穂郷　今新治郡玉取村其郷ハ〜て地の形勝を見きハ是即本郷

なる事三村郷の類なり（近世も侯伯治所の地たると見る歟）白河文書（興國二年北畠准后の書に師冬〻寄来之後、度〻被仰了、去十四日、六月打入當國方穂庄、同十五日、取陣於當城田後高山了、とある筑別府尾張太郎幸實の目安に〻暦應四年六月十六日、興國二年なり馳向于小田寶篋塔峰、致合戰（按小田寶篋山石造の寶篋印塔あり蓋小田氏の物かり）追落御敵、即於西尾崎取陣、警固仕訖、七月八日、於玉取警固（中略）同十二月、玉取御發向關城之時、御共仕畢とあり（玉取〻師冬本營の地、此地より出る時〻諸城と攻しぶり）是南北朝より同時の事と記とるゝて二書と比較されば方穂の玉取ふる筑知る歟、此地弘安勘文に南條方穂庄とあり（按東鑑建久元年片穂平五片穂平六あり方穂に同て此地の人

〻又北畠分限帳に方穂刑部少輔あり思ふに其先此地の人なる准后に小田關城に從ひ竟に衛送して伊勢に留まりしより後と見えたり）

右九郷北條五郷の内清水、南條四郷の内栗原、方穂、水守、合て四郷今新治郡に入て大貫筑波三村、佐野（北條）渚蒲（南條）の五郷に古河内郡島名、八部、真幡の三郷と詳ならざる一郷（河内郷）と浅加えて今の本郡とせ

て蓋文禄検地の變革かり

神名帳筑波郡二座（大一座小一座）

筑波山神社名神一大一小○（按日本紀略に據るに名神大八男神なり）男神社八西峯に在て女神社〻東峰に在て風土記云、古老曰、昔祖神尊巡行諸神之處到駿河國福慈岳（フジ）、卒遇日暮、請欲寓宿、此時富慈神答曰、新栗初嘗、家内諱

忌、今日之間、冀許不堪、於是祖神尊恨涙、罵告曰、即汝親、何不欲宿、汝所居山、生涯之極、冬夏雪霜、冷寒重襲、人民不登、飲食勿奠者、更登筑波岳、亦請容止、此時筑波神荅曰、今夜雖新粟嘗、不敢奉尊、豈設飲食、敬拜祇承、於是祖神尊歡然、詔曰、愛乎我胤、巍哉神宮、天地竝齊、日月共同、人民集賀、飲食富豐、代代無絶、日日彌榮、千秋萬歳、遊樂不窮者、是以福慈岳常雪、不得登臨、其筑波岳、往来歌舞、飲喫至于今不絶也、原云以下畧之、○按榮落韵、恐崇誤、此歌皇朝韻語の祖〻、又按社祭神何神たる詳からす、總國風土記木花開耶姫命とし〻今伊弉諾伊弉冉二尊なりとはまとも風土記ふ援まゝ信〻〻〻〻〻〻

男神　類聚國史又紀略　弘仁十四年正月廿一日、丁巳、従五位下筑波

山神、為官社、以霊驗頻著、文徳實録、天安二年五月壬戌、筑波山神二柱、授従四位、按下ゟ攄八此時従四位上之三代實録、貞觀十二年八月廿八日戊申、授従四位上、筑波男神正四位下、十三年二月廿六日壬寅、授正四位下、筑波男神従三位、日本紀略、寛平九年十二月三日甲辰、奉授筑波男神位一階、正三位なを按是ゟを後天慶三年、永保元年、永治元年、治承四年と四度贈位ゟて正一位ふ叙をらるゝかれハ元暦二年、建仁元年、弘長元年、建治元年、明應十年、五度の贈位ふゝ最早其列ゟ與さらさをしゝ

女神　續後紀、承和九年十月壬戌、授無位筑波女大神、従五位下、文徳實録、天安二年五月壬戌、筑波山神二柱、授従四位、按従四位下之三代實録、貞觀十二年八月廿八日戊申、授従四位下、筑波女神従四位上、十

六年十一月廿六日辛巳授従四位下筑波女神従四位上按十二年前二十六年前
後階とも同じくハ十六年々誤複をいふや後寛平九年八大社の
ミ贈位あり女神を與うら云複う位階浅誤をいう詳からさき々
位階推算す
為うらし

庄保山

田中庄　今新治郡田中村庄名の本之其村山王祠天正十八年五月
淺野彈正少弼木村常陸介の制札ふ禁制常陸國田中三拾參郷之
本郷と題をり此庄東鑑文治四年三月京都の事書に常陸國村田
〻田中下村等庄事或安樂壽院領云或八條院御領云年貢可沙汰何
御倉候哉とあり六月京都の御答して皆八條院御領なる後知る

是平氏西奔の故ふ領家知まさりしなり　後八田知家の七子田中九郎左衛門尉知氏
其近地なるを以て地頭とかを五世孫三郎隆繼ふ至て高師直の
黨して亡ふ小田系圖按院雑色田中系圖ふ隆繼子隠岐守繼政院北面あり子孫雑色とかをつゝも御領と地頭をいふ
由ふ其内四分一を元弘の頃北條左近将監時興入道恵性高時の弟地頭をり
しこう亡ひ後貞和二年佐竹貞義の地となを清音寺文書子義篤孫義
宣代々傳えをり佐竹讓状山王祠應永卅三年五月文書ふハ梵方正長
元年十二月よハ理兼とをるを共ふ寄進状かきを々足利の時ハ地
頭と見ゆれと其姓名詳なをしに其後又小田氏兼併をいと見え明
應五年九月成治永禄三年八月氏治其餘小田氏家臣の状あり弘

安勘文田中庄五百丁嘉元田文ゑ下妻庄の次ゑ同加納田中庄と
舉ゝり（是其庄蔓延して下妻庄ゑ逼ゑ一故ゑ今も下妻東邊ゑ田中庄なるゝとゝいふ村なり）信太郡楢縫神
社、波多野刑部少輔秦治宗（信太郡太谷城主ゑ）天文廿五年寄進ゼ
る大般若經ゑ田中庄栗原郷長福寺常住と識るゝ（此寺の旧物と見えゝり）
西ハ下妻東ハ栗原まても廣こりし地見ゆ（岩松文書至徳三年四月上杉朝宗状ゑ田
庄小目郷又佐竹知行目録慶長五年ゑ田中庄沼崎村此二村ハ今筑波郡ゑなり）
方穂庄　弘安作田勘文南條方穂庄九十一町一段嘉元田文南條方
穂庄六十四丁四段半櫻雲記（興國二年方穂庄ともあゝて郷名と以ゝ
庄とゼり）何世誰人の領しもん後田中ゑ併とられしなるべし

山之庄　税所切手員數筑波北條七通山庄一通鹿島永享富有注文
山庄内本郷善鏡入道、完戸備前守知行同所郷法性入道、宍戸中務
丞知行（善鏡法性ゝ富有の人ゝ）園部状（天文）山之庄松岳寺（寺今新治郡戸崎村ゑ遷ゑ）ゑとゝ
て其庄名あきらとる弘安嘉元ゑ見えさるハ其後の新立ゝや文禄
地圖ゑも雪入藤澤の間ゑ山庄と記ゝり（今ゑ永井本郷大志戸小野小高東成寺及今新治
郡今泉小山寄澤邊九村山庄と云ふ）
熊野保　弘安勘文筑波北條酒依三十丁五段大（熊野保あり）（按酒依ハ今真
壁郡酒寄村ゝ）筑波潤朝申状の叔父熊野別當朝範ゝ所帯ゑもあゝさるゝ
率分保　同上筑波北條大澤三十七丁（率分保）嘉元田文ゑ四段小多

（按大澤ハ今小澤村ニ小田族北條筑前守道率分堂領ト見ヘタリ知リ後大澤氏あるを此地と稱セ〜なるべ）

ヲ

筑波山　風土記云、夫筑波岳、高秀于雲、最頂西峰峥嶸、謂之雄神、不令登臨、但東峰四方盤石、昇降決屹（按硅砒誤）謂之雌神、其側流泉、冬夏不絶、是みなの川此源ふて小流とあり筑波川ニ入る　自阪以東諸國男女、春花開時、秋葉黄節、相携駢闐、飲食齎賚、騎歩登臨、遊樂栖遲、其唱曰、（都久波尼甫伊由岐阿波弁等伊比志古波多賀已等岐氣波加彌尼阿須波氣弁也、都久波尼及尼呂甫伊保利呂都麻奈志甫和我尼弁欲呂波波夜母阿氣奴賀母、）詠歌甚多、不勝載重、俗諺曰、筑波之會不得娉恐聘財者兒女不為矣、（□中の字本文ハ吉田令世歌ハ色川三中ヨリ補ひ〜ふ從ふ兒女の句意詳からず蓋耀歌會の事ヨ付たる文ふり）萬葉高橋蟲麻呂

登筑波山為嬥歌會日作歌、原注嬥歌者、東俗曰加賀比（其事ハ歌中ニ詳なり猶又常陸島郡條と参見ヘベし）此山本郡の北ニ聳え真壁郡と背ヨ〜古茨城郡と東とに三郡の界ニ盤踞して頂ヨ雙峰あり西ハ男體（雄神の社）東を女體（女神の社）と云ふ二峯と面背ヨ絶遠望それぞれ殆と馬耳の雙尖ニ成ヨり其間相距ふ一里ばかりを山麓の東ヨ山口村あるを古の正路ニ成ベし〜今神郡の方ヨりを上る頂まてハ二里之（十八町上りて筑波町ヨり）山脉東ニ走リを小田山とかり北ヨ連亘〜を弓袋（將門記ヨ見ゆ）となるを抗ヨ起伏して葦穂加波の諸山とかり中郡の南界ニ赴く萬葉ヨ此山の歌多けれとも丹比真人國人ノ歌山の神靈ヨり登覽の勝ま

そ筑盡きり其後とゝりて又葉山志げ山なとも詠きゝ此山頂
より麓ゝ至り松樅叢生し高山ハ其類少ふる茂以てこゝ〻ハ稱
きゝ〻ふる所〻

阿自久麻山　萬葉集未勘國歌云安杼毛敝可阿自久麻夜末乃由豆流波
乃布敷麻留等時伎甫可是布可受可母この山名所名寄本國の山ふ
りといふ八雲御鈔ハ攝津とに中山信名曰小田治久康永二年佐賀美濃守
ゝ與る書云爲加恩地阿地熊平澤可致成敗云とゝ行る平澤ハ筑波
山麓の村なまハ阿地熊即阿自久麻ゝて其地も山ハ傍たる所ゝ
ゝ故ゝ山とも呼へるゝゝ今ハ其地名なゝ

常陸國郡鄉考巻四　終